

家族の変化と地域の変化
—母のライフヒストリーを通して—

学籍番号 12032027 番 木村 麻佑
指導教員 立木 茂雄

目次

1 序 論.....	2
2 先行研究の展望.....	2
2.1 家制度から近代家族へ.....	2
(1) 直系家族制と夫婦家族制.....	3
(2) 家族変動.....	4
(3) 家族機能の変化.....	7
2.2 新しい変化の動向.....	8
3 調査概要.....	11
3.1 調査対象者.....	11
3.2 調査対象地域.....	12
3.3 調査の手続き.....	13
4 結果・考察.....	13
5 結 論.....	46
おわりに.....	47
参考文献.....	47

1 序 論

人は家族のなかで生まれ、そして育てられる。家族ほど身近な集団はない。そこで誰でも家族について多くのことを知り、また体験している。そうした知識や体験が、家族を社会的に考えていくための手がかりとなる。

筆者は、5人きょうだいの長女として生まれた。現代では珍しい三世帯直系家族である。筆者自身の母親は、L家の嫁として嫁ぐ前まではK家で12人で生活していた。K家で母が生活をしてきたころの話を知っていると、同じ直系家族でもいろいろな違いがあるのだと気づかされる。つまり、家族は普遍的なものではないのだ。食事風景ひとつをとっても、家族によってさまざまである。私たちが「あたり前の家族」と思っている家族は、決してあたり前の家族ではないのである。その事実性は、他の家族の話を知ることによって立証される。

ところで、日本では、時代とともに家族形態が変化し続けている。戦前の農村地域でよく見られた伝統的な直系家族や三世帯以上での同居は減少し、逆に戦後全国的に核家族が増加し、しかもその一軒当たりの子どもの数は年々減少傾向を示している。加えて、高齢者が夫婦のみで生活したり、ひとりで暮らすケースが増えている。

急激な勢いで変わりゆく家族形態。その変遷を筆者自身の母親にインタビューすることで、変わりゆく家族形態の背景には何があるのか探してみようと考えたのである。

そこで私は、家族関係の変化と地域の変化に焦点を当て、「母が生まれ育ったK家の家族関係の変化は、独立的におこったのではなく、地域の変化とともに起こったのではないだろうか？」という仮説を立てた。仮説を検証するために、筆者自身の母に聞き取り調査を行った。今回、聞き取り調査を行うことで、家族関係の変化と地域の変化との関係性が明らかになるはずである。

2 先行研究の展望

2.1 家制度から近代家族へ

1945年の敗戦から現在にいたる半世紀ほどの間に、日本人の家族観やどのような家族が典型的であり、望ましいかという考え方が大きく変化した。その変化の基本的性格をなるべく単純化していえば、「直系家族制から夫婦家族制へ」である。

(1) 直系家族制と夫婦家族制

戦前の家族のあり方を最も左右していたものは、1896年に公布され、翌々年に施行された明治民法のもとでの家制度である。それは、「戸主権」と「家督相続」という2つの柱からなっていた。戸主権は、家族成員に関する婚姻や養子縁組など身分行為の許可権・居住指定権と、その違反に対する制裁権をその中心的な内容とした。家督相続は、戸主の地位の継承であった。そして、戸主の有する身分上・財産上の権利は原則として長男である家督相続人によって受け継がれ、その代わり戸主は、家族成員に対して扶養する義務を負った（後藤 1997）。

渡辺洋三によれば、この戦前の家制度は、政治的には「天皇制」およびそのひとつの階級的支柱である「地主制」のイデオロギー的・社会的基盤であり、社会的には、村落共同体その他の日本社会の共同体的な社会関係、家父長的な身分関係の基盤であり、そして経済的には、日本資本主義の再生産構造を媒介する基盤であったとみることができるという（渡辺 1999）。

直系家族とは、父系の世代間関係を強調する家族形成のひとつの類型である。この家族タイプでは、家長夫婦が息子中のひとりの家系の次代継承者として、彼の結婚後も（彼の配偶者を含めて）家族的世帯内に残留させる。家長ならびに家族員は、個々人の即時的・現実的な欲求充足よりも、むしろ家系・世帯・生活集団の超代的な連続性を強く志向する（渡辺 1999）。

戦前の「家」制度の廃止を中心にした法改正とともに、戦後は、西欧型の夫婦家族制の導入をとおして家族の民主化や近代化が国民的課題として目ざされた。戦後の家族社会学も新しい家族関係のあり方を啓蒙する役割の一旦を担うことが期待され、自らも積極的にその役割を担おうとした。それまでの「家」制度であった家父長制の直系家族制の家族は封建的な前近代的家族と位置づけられ、新憲法ならびに新民法にもとづく男女平等の新しい夫婦家族制の家族は、達成されるべき民主主義的な近代的家族として位置づけられた（渡辺 1999）。

夫婦家族とは、夫婦もしくは夫婦と未婚の子女によって構成される家族のことである。夫婦家族では、子どもが結婚すると両親の家族から出てゆき、新しい夫婦家族を形成する。したがって、直系家族におけるように、長男が後継ぎであるという観念や、家族が世代的に再生産されるという発想はありえない。遺産はとくに遺言で指定がない限り、すべての子どもたちに均等に分配される。これに対応して、老親扶養の義務もすべての子どもたち

が均等に分担することが法的には期待される。また、職業は家業ではなく、個人の一代かぎりの職業と考えられる（渡辺 1999）。

近代的な家族という民主的な家族のことかと思うかもしれないが、家族の社会史てき研究から出てきた「近代家族」の概念はそれとはかなりニュアンスが異なる。『21世紀家族へ』を記した落合恵美子は、日本の近代家族の特徴を次のように述べている。

- ① 家内領域と公共領域の分離
- ② 家族構成員相互の強い情緒的關係
- ③ 子ども中心主義
- ④ 男は公共領域・女は家内領域という性別分業
- ⑤ 家族の集団性の強化
- ⑥ 社交の衰退とプライバシーの成立
- ⑦ 非親族の排除
- ⑧ 核家族

これらの項目は、どれもみんな近代家族の特徴などというまでもない、家族なら一般的に持っている性質であるようにみえる。しかし、このような家族は実は普遍的ではなく、近代という時代に出現した歴史的現象にすぎないのである（落合 1994）。

(2) 家族変動

直系家族から夫婦家族に変化したことについては、大小多数の要因が想定されるが、その主要なものは次のとおりである。

① 急速な産業化・都市化

敗戦時の日本社会では就業人口のほぼ半数が農民であり、農家では直系家族が適合的な家族形態であった。しかし、その後、第二次産業・第三次産業に従事する人口が増加し、かれらは都市に集住していった。その職業的・地理的移動にとっては夫婦家族が適合的な形態であった。

② 個人主義思想と男女平等思想

日本国憲法は主権在民の民主主義政治を国家目標としてかけ、その思想的系として個人主義と男女平等の価値を主張し、国民は次第にそれらを受容していった。それらの価値にとって、直系家族より夫婦家族が相対的にみて適合的な家族形態であった。

③ 結婚観の変化

日本国憲法は、婚姻は両性の合意のみによって成立すると規定し、旧来の「家」の結びつきを重視する結婚を否定し、現実に行われる結婚でも見合い婚が減少し、恋愛婚が増加した。これらの変化は、直系家族より夫婦家族を望ましいとさせた。

④ 社会保障制度の整備

1960年ごろ、政府は国民皆保険・皆年金体制を形成し、医療保険はそのときから、年金保険は一定の時間的経過につれて次第に機能するようになり、これに国民の所得水準の上昇が加わり、子ども家族による老親の経済的扶養の負担が減少していった。これは、直系家族の必要性を後退させ、夫婦家族の出現のための余地を拡大することになった（副田 2000）。

1960年代になると、家制度と決別しないままの核家族化が進行する。当時の核家族は、多産少死から少産少死への人口転換の移行期にあたる、多産少死の第二世代が主流となり作った家族であった。長男・長女が同居し、残りのきょうだいは家を出て、核家族を作るというように、きょうだいが多という人口学的な理由で核家族はしていたけれども、大家族を夢見る核家族だった。核家族化してよかったとも思っていたし、家制度は窮屈だとも思っていた。戦前の「家」と質的にはずいぶん変わったが、家制度が完全になくなる必要はなく、少なくとも、直系家族制の同居規範はすぐに消滅したわけではなかったのである。この、家制度と近代家族の二重構造は 1975 年まで続くこととなる。1975 年以降、核家族率は頭打ち、もしくは低下する。単独世帯の増加と並んで、一夫婦当たりの成人する子どもの数の減少が、その原因である。この人口学的な理由によって、家制度はいよいよ本当に消滅するか、根本から変質せざるをえないところに至っている（落合 1994）。

そして現在、30代前半での独身率は男性 4 割、女性は 2 割を超え、子どもが手を離れた母親の 7 割は家庭の外で働き、「標準をはずれた人々」がいまや多数派になりつつある。誰もが似たようなライフコースを歩み、似たような近代家族を作った家族の時代が終わり、いよいよ「個人を単位とする社会（落合 1994）」が始まるのではないだろうか。

森岡清美は、日本の家族変動について「理念的にとらえて、家と呼ばれた戦前の直系制家族から、俗に核家族と呼ばれる夫婦制家族へ変化したとみた場合、すでに二段階の変化を経過したように思われるのである」とし、「第一段の変化は、家という直系制家族の変質によって生じたもので、父子継承ラインの切断による直系制家族から夫婦単位のもしくは夫婦中心の夫婦制家族への移行を内容としている」と述べている。そして、「第二段階の変化は昭和 50 年代以降、経済の安定成長のなかで出現した。第一段の変化は成人となった子

と親との関係、とくに父子継承関係の変化によって出現したのに対し、第二段の変化は夫婦関係のあり方の変化として現れた」と述べている。したがって「第一段の変化は家族団体から家族という小集団への変化であった。これに対して、第二段は小集団から家族という関係複合態への変化といえよう。家族員個々の自律性の増大を内容とするものである。これは個人化ととらえている」と述べている（森岡 1983）。

『家の変動ノート』を記した松本通晴は、戦後の「家の解体の図式」を次のように著している。

● 構造

・家の永続

家の観念・・・世代・階層・職業・農村都市間の分裂。潜在化。消滅。

家の成員・・・直系家族成員の縮小。傍系・非血族成員の離脱。核家族化の傾向の地域的格差。

家の氏・・・夫又は妻の氏

・家長権

長子による継承・・・権限の委譲、縮小、喪失、親権夫権の顕在。

長子単独相続・・・分割相続の傾向。

● 機能

・先祖祭祀・・・世代間・地域間の差異。儀礼の形式化。

・生活保障・・・成員の経済的独立。固有ないし、本来的機能化。

● 物質的基盤

・家業（経営）・・・異種就業形態（家族労働の評価）

・家産・・・財産ないし生産手段化

家の構造をあらわすものの一つとして、「家の永続性」が挙げられる。家の分裂、潜在化、消滅などの言葉にもあらわされるように、家の永続性を支えてきた家の観念は、戦後、世代により、職業や階層、地域社会の所属を異にすることによって解体してきた。また、傍系家族成員や非血族成員が離脱し、直系家族が核家族化することによる家族構成の縮小も家の永続性の消滅の要因となっている。家の構造をあらわすもう一つ概念は、「家長権」である。通常、家長権は先祖祭祀、座席、家族労働の指揮監督、財産相続、動産の管理、家の代表の諸権限としてあらわされる。しかし、その権限は委譲もしくは消滅し、農村における分割相続の登場により、家長権と関連していた長子単独相続も解体したのである（松

本 1981)。

家の機能的解体については、先祖祭祀の機能と生活保障の機能のふたつに分けられる。先祖の祭祀は家の超代的な永続性と密接不可分なものである。しかし、この祭祀行事に対しては、儀礼の形式化と地域間および世代間の差異が明瞭になっている。また、生活保障機能についても、家族は個々の成員の経済的独立を促し、保護機能、教育的機能、娯楽機能といった副次的機能も次第に失っているのである(松本 1981)。

最後に家の物質的基盤の解体過程を取り上げる。家は家族成員のたがいの共同体験のうちに持続されている。これには、先祖伝来の家業経営が基礎的条件の一つをなすが、家族労働力の比重が高く、経営と家計が融合したような家業の形態は、戦後、著しく解体していることは明白である。また、家産についても、家族の維持を目的とし、先祖の祭祀を絶やさないうえ、自由な処分を禁止・制限された家族共同の財産であるという、かつての家産の観念は崩壊したのである(松本 1981)。

(3) 家族機能の変化

直系制家族から夫婦制家族への家族形態の変化は、同時に家族機能の変化をももたらした。かつての家族は、人間が生活していくために必要なことのほとんどを家でまかなっていた。しかし、社会が発達しさまざまな機能集団が発達してくると、家族の諸機能はそうした機能集団に移譲されるようになった。こうした状況は家族機能の縮小としてとらえられた。とくに、産業化の進展によって、家族の生産的機能のほとんどは工場や企業に吸収され、家族は消費機能を中心とするようになった。そのほか、教育機能は学校に、保護機能は警察や消防署に、保健機能は病院や診療所にというように、家族だけで担当する機能はたしかに縮小したといえる。ただし、家族はこうした諸機能をすべて失ったわけではない。日常生活においては、さまざまな生産活動が行われているし、家庭教育も重要な役割を担っている。保健機能は主として専門的な医療機関で行われるとしても、家庭における看護も欠くことのできないものである(望月 1995)。

家族の機能は、経済的機能・教育機能・保健機能などの個別機能を数えあげることでもできるが、こうした方法では家族機能の特質を把握することはできない。家族機能は、むしろその多面性、包括性にその特質がある。すなわち、家族はその成員が生活するために必要なことなら、特定の機能にとらわれることなく、どんなことでも行うのである。専門的機能を果たす社会集団がどんなに発達しても、家族はそうした動きをやめるようなことは

ない。しかし、家族だけで十分に機能を果たすことができず、さまざまな機能集団を活用しながらその機能の充足を図っているのである。その意味では、家族機能は縮小というより、その機能を果たすために、社会への依存性を強めるようになったといえることができる（望月 1995）。

家族の諸機能が、社会の機能集団に移譲される傾向にあることは、家族機能の変化として認められることを前提としながらも、それは単なる機能縮小ではなく、家族機能の鈍化あるいは機能専門家としてとらえる考え方もある（望月 1995）。

2.2 新しい変化の動向

（ 家族制度の改革を基礎として、家族形態や家族機能に変化をみせた日本の家族は、1980年代に入ると新たな変化を見せ始めた。この変化は、ひとつは、近代家族の基本理念にかかわるものであり、他のひとつは人口学的変化を基盤としたものである（望月 1995）。

近代家族の理念は、個人の尊厳と両性の本質的平等を基本的価値としている。夫婦家族制が導入され、この基本的価値が国民に受容されるようになるにつれて新たな問題が生じてきた。新しい変化の口火は、女性たちによって切られた。1975年の国際女性年とそれに続く国際女性の10年の活動がその導火線であった。社会のあらゆる場面における性差別の撤廃を標榜したこの運動は、その後も新しい社会秩序を求めて、現在も着実な歩みを展開していることは、周知のとおりである。こうした活動が家族にも大きな影響を与えた（望月 1995）。

（ 第一の問題は、「両性の本質的平等」に関わるものである。いわゆる「男は仕事、女は家庭」という性別分業への異議申し立てであった。産業化の進展によって、職場と家庭が分離してくると核家族化した状況のなかで、安定した生活を確保するためには、家族のなかの2人の成人がそれぞれの生活領域を責任をもって守ることは合理的で、役割の違いがあってもそれが価値の違いをもたらさず、性差別を生むことになるとは意識されなかった。家族成員間の情緒的緊張を緩和し、家族の集団としてのまとまりを維持していく役割や生活に必要な家事労働を行うことと、それに必要な経済的基盤を支える役割との間に価値の差があるとは考えられなかったのである。それは、小集団における目標達成のためのリーダーシップと集団維持のためのリーダーシップになぞらえて、核家族においては父親（夫）と母親（妻）によって、二つのリーダーシップが分担されているととらえられ、それだけに機能的であるとされていたのである（望月 1995）。

しかし、現実の生活では、そうではなかった。社会全体の価値規準は、経済第一主義であり、利潤を生む活動が価値あるもので、家事労働のように利潤をあげない活動は、価値なきものと考えられた。また、生活を成立させる基盤が経済力にあるとすると、専業主婦の立場にあって、収入のない女性は、自分の生活の基盤を夫に頼らざるをえず、とても自立した夫と対等な存在とはいえないという認識も広まってきた。こうして、これまで自然なことが指摘された。女性の自立意識が高まり、高学歴化がすすむと、これまで、家庭に閉じこもっていた、あるいは閉じ込められていた女性たちが、社会的活動を積極的に展開するようになった。その具体的現われが、既婚女性の就業であり、いわゆる「共働き」家族の増加である。しかし、性差別分業の壁は厚く、高い。女性が職業をもつようになると、当然、家事労働に費やす時間は少なくなる。家庭電気機器の普及によって、家事労働の省力化がすすんでいるとはいえ、依然としてさまざまな活動があることはいうまでもない。そこで女性の就業によって不足する分は、男性によって補わなければならない。集団活動には役割の分担は欠くことができない条件である。性別分業そのものが差別ではなく、それを固定化していたことが問題である。男女の協力によって成立する家族生活において、どうかたちになることが性差別をなくすことになるのか、平等とはどういうことなのか、まだまだ検討されなければならない課題である（望月 1995）。

第二の問題は「個人の尊厳」に関するものである。家制度のもとでは、個人の存在は認められなかった。とくに、女性は自分の生活領域をもつことができず、常に他者のための人生を過ごしてきた。夫婦家族制のもとでは、こうした女性はもちろんのこと、家族成員一人ひとりがその存在を主張することができるようになった。それは、集団としての家族のなかに、個人の生活領域が認められるようになったことを意味する。あるいは、個人の自己実現が家族的役割遂行より優先されるようになったといってもよいであろう（望月 1995）。

こうした傾向は、「個人化」や「個別化」あるいは「私事化」、「私化」などと呼ばれているが、まだ必ずしも確定した概念とはなっておらず、人によって同義的に使われているのが現状である。ここでは、個人化は家族生活のなかに個人または生活領域が確保されていること、と捉えることにする。したがって、集団としての家族成員の共同領域も確保されている状態を意味する。いいかえれば、個人としての自由な行動と家族員としての役割を遂行することがバランスよく調和しており、個人が家族のために犠牲になるということは

なく、家族が機能的であることを意味する。それは、近代家族の理念を実現しているといってもよい。もちろん、個人領域と共同領域との割合によって、集団性が強いものから、個人が優勢のものまで、さまざまな状態を示すことになる。こうした状態から共同領域が狭くなり、ついには存在しなくなったのが個別化である。家族成員は自分の生活を最優先し、集団としてのまとまりをなくした状態である。私事化あるいは私化は、こうした個人化や個別化と関連しているが、同じことではない。社会の近代化によって、人間の生活行動が公的領域と私的領域に分化してきた。そうした状況を踏まえ、家族生活は私的領域として位置づけられるようになった。この私的領域は、他者の介入を許さないものであり、個人の自由な意思によって営まれ、プライバシーとして尊重されることを要求する。この傾向が強まると、公的領域を成立させる規範や制度を無視することも正当化されるようになる。家族の社会的側面が無視ないし軽蔑される傾向といってもよい（望月 1995）。

現代家族の第三の問題は、家族の多様化といわれる傾向である。これは、個人化傾向と密接に関連している。家族の多様化は、家族形態とくに家族構成の多様化を意味している。すなわち、これまで家族といえば、家制度の時代では祖父母とあととり夫婦に子どもという三世同居の家族がその典型的な形としてイメージされていたし、夫婦家族制のもとでは夫婦と子どもという核家族形態がその代表的なものとされていた。しかし、現実の家族形態は、祖父母の一方が欠けているもの、父子家庭や母子家庭など単親の家族、あるいは祖父母と孫など標準的家族構成とは異なる家族が存在する。そして、それは今始まったことではない。したがって、現在問題とされている多様化は、単純に家族の存在形態が多様化したということではない。問題は、これまでは、標準的形態をはずれた家族は、一時的なものか、逸脱したものと認識されていたのが、それらもひとつの家族のあり方として認識されるようになり、特別視されなくなったということである（望月 1995）。

家族の多様化は別の意味で用いられることもある。それは、家族の代替物を家族としてとらえ、多様化として論じられることもある。たとえば、親族関係にないものどうしの親密な共同生活やペットも家族であるとするものなどである。当事者が家族であると思っていれば、家族であるという論理である。しかし、こうした生活形態が家族であるという場合の家族概念は、必ずしも明確にされていない。家族のもっとも基本的な条件である「親族からなる集団」という条件を無視しては、家族そのものを論じることはできない（望月 1995）。

しかし、さまざまな家族の代替物が存在することは事実である。それは家族の多様化と

してとらえるのではなく、家族のライフスタイル化ととらえるべきものである。ライフスタイルは、個人が自分の人生をどのように歩むかという生き方、生活の仕方にかかわる概念である。したがって、個人は自己の自由な意思に基づいて、さまざまな生活様式を選択することができる。かつては、成人に達すれば、結婚して子どもを生き育てること、すなわち家族生活を営むことが当然と考えられていた。したがって、ほとんどの人が家族生活を基本的な生活様式としており、家族以外のライフスタイルは逸脱したものとして、社会から特別な目で見られることが多かった。寛容な現代社会では、個人の尊厳という価値観とあいまって、家族生活以外の生活様式も、個人の選択したライフスタイルとして認められるようになった。家族は、さまざまなライフスタイルのうちのひとつでしかなくなったのである（望月 1995）。

こうして、個人の尊厳と両性の本質的平等を基本理念とした夫婦家族制のもとで、家族生活の民主化という流れではじまった現代の家族は、それまでの前近代的な家父長的家制度の諸問題を完全に払拭しきれないうちに、性別分業の崩壊、個人化、ライフスタイル化の進展という新たな動向を示しはじめている（望月 1995）。

3 調査概要

前章の先行研究で、家制度から近代家族、そして脱近代家族へという家族の変化をみた。そこで、私は自身の母の生まれ育った K 家と東大阪市日下町に焦点を当て、「母が生まれ育った K 家の家族関係の変化は独立的におこったのではなく、地域の変化とともに起こったのではないだろうか？」ということ仮説として、調査を行い、仮説を実証したいと思う。

3.1 調査対象者

上記の仮説を実証するために、筆者自身の母に聞き取り調査を行った。母は、1958年に大阪府東大阪市の日下町（二丁目）にある、K家の長女として生まれた。そして、1981年に筆者自身の父と見合いを経て結婚している。今回、母を調査対象者として選んだのは、日下町の様子が大きく変化したと考えられる1960年代後半～1980年代を母はK家で過ごしていたからである。調査の対象となるのは、母がK家で生活をしていた期間である。

3.2 調査対象地域

今回の調査で対象となる地域は、大阪府東大阪市の日下町（二丁目）である。そこで、東大阪市について簡単に触れておきたいと思う。

東大阪市は、昔から存在していたのではなく、枚岡・河内・布施の三市が合併したことにより発足したのである。昭和 42 年（1967 年）2 月 1 日に「住みたいまち」を合言葉に、東大阪市が誕生した。東大阪市の誕生までには多年に渡る関係者をはじめとするさまざまな人たちの血のにじむような苦勞があったようである。

昭和 38 年（1963 年）ころから、枚岡・河内・布施の三市は大阪市と連なる都市として人口の増加が著しく、人口過密からくるさまざまな都市問題に対処するには、合併による行政力の強化がなにより必要だと、合併の機運が高まってきた（東大阪市企画部）。

一方、大阪府は昭和 40 年から中央環状線と築港・枚岡線（現国道 308 号線）の交わる長田、荒本、横枕など 220 万㎡の地に問屋や倉庫、そのほかターミナルビル、オフィスビルなど流通業務を中心とする副都心の建設を進めていた。しかし、この受け入れは三市一体で行うことが地元開発計画を立てる上にも最も良い条件をつくり得る、さらには枚岡の住居地域、河内の工業地域、布施の商工業地域という、それぞれ特色を持った市が合併することで短所を補い、長所を伸ばすことができるなど合併の必然性が認識されるようになった（東大阪市企画部）。

こうした背景をもとに昭和 40 年 11 月に布施市長が枚岡・河内両市長に対し、正式に合併の申し入れを行った。大阪府知事も同月、三市長を招いて ①行政の広域的処理の要請が高まりつつあるなかで、これを進めて合併による都市規模の適正化を図り、行財政能力の充実に努めてほしい ②副都心の造成を計画しているが、合併によって地元が一体となり、総合的な町づくりを考えてほしい、と強く要請した。三市は昭和 41 年 3 月、臨時市議会を開き、三市合併協議会の設置を決めた。協議会では民生、経済、建設などあらゆる問題について協議を進める一方、三市はそれぞれの市民と合併問題に関する説明会や懇談会を開き、理解と協力を求めた。そして、昭和 41 年 8 月 1 日、三市長は合併協定書に調印。10 月 25 日には自治大臣から告示があり、昭和 42 年 2 月 1 日に全国の注目のうちに東大阪市が誕生したのである（東大阪市企画部）。

このような合併活動の経過の末、新生東大阪市は市民の福祉を基調として当時大都市圏内において市域をこえて進む無秩序な市街化、そこに巻き起こる交通、公害などさまざまな問題に対処して「住み」「働き」「憩う」新市のまちづくりを目指し、市民生活の向上と

福祉の増進をはかるため、輝かしい希望と期待の船出をしたのである（東大阪市企画部）。

下の図1は日下町が東大阪市においてどこの位置を占めるかを示したものである。

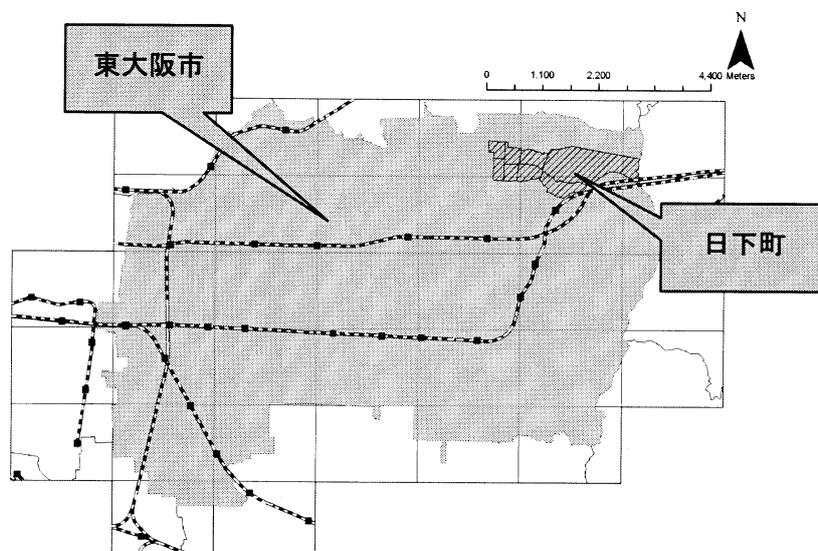


図1 東大阪市のなかの日下町

3.3 調査の手続き

今回の聞き取り調査では、被調査者の誕生から現在に至るまでのライフヒストリーを出来る限り自由な形で語ってもらった。調査は、2006年10月と11月に数回行い、録音テープは合計約5時間半程度となった。

4 結果・考察

本章では、筆者自身の母（Aさん）のライフヒストリーを時系列に沿って紹介しながら、考察を加えていきたいと思う。ここでは、個人情報の保護のため、母をAさん、母の弟をBさん、母の妹をCさんとしている。また、読みやすさのための順序変更、背景の補足説明、最小限の解釈のほかは、なるべく手を加えていない。語りには「」をつけ、語りのなかで補足の必要があった場合には、（ ）を使用している。筆者の説明などは「」をつけない部分で行っている。

では、Aさんのライフヒストリーをはじめることにする。

4.1 生い立ち

「私は昭和 33 年の 7 月に生まれました。生まれたときは、K 家は男の子がいつも生まれるので絶対男の子だと思われていました。いちばん初めの子供は仏さんのある仏間で生むことになっていたので私の母は産婆さんに（家に）来ていただいたそうです。K 家は毎回ずっと男の子が生まれていたのでお祝いに来ていただいた方からは、みんな男の子のお祝いをいただいたそうです。でも女の子だったので母はすごくがっかりしたようです。」

「きょうだいは 3 人いて 2 番目は弟です。昔から男の子を生んだら堂々と寝ていたらいいのですが、女の子を産んだときは小さくなっていなければならないということを書いていました。だから私を生んだときは小さい感じになっていたのだと思います。弟を生んだときはみんなに『でかしたぞ』と言われたのですごく堂々として休んでくれたようです。」

「小さいころから男の子と女の子の格差が平静から出ていて、弟は跡取りとして特別な存在だったと思います。3 番目も男の子が欲しかったのに女の子だったので、母も父も男の子が欲しかったと言われていたので妹（だったの）は少し残念という感じでした。」

「一番多いときで親族だけやったら 10 人で、家に勤めに来てくれる人、今でいえば住み込みさんというのが 2 人で 12 人で暮らしていた。家業は庭園石材業をやった。庭園石材業と農家をいっしょにやっていたわけ。庭園石材業（が中心だった）。農業は自分とこで食べる分と隠居の分、父さんの兄弟の隠居に渡す分を作った。田は 5 月から 10 月まで。そのほかは野菜を植えたりしてた。白菜とか大根とか人参とか、そういうのを季節ごとに植えていた。それは全部よそに卸しに行ってお金にするんじゃなくて、自分らが食べる食代として使ってた分だった。」

「胡麻とかあいうのも全部自分とこで育てて、乾燥させてたから、買わなくてもいいし、だいたい自分とこで使う分は調味料でもしてた。みりんなんかはお酒から作ってた。だからぜんぜん今の仕組みと違ってリサイクル、ゴミっていうのはほんとにない。」

当時の K 家は、親族 10 人と住み込みさん 2 人の合計 12 人で生活していた。A さんの祖父・父はともに 8 人きょうだいの長男であったため、K 家は本家の本家であった。そのため、人の出入りは絶えなかったようである。

以下の図 2 は、A さんが生まれた翌年の昭和 34（1959）年の日下町である。後の語りにもあるように、当時の日下町には、溜池があり、田畑が広域に渡って存在していることが分かる。

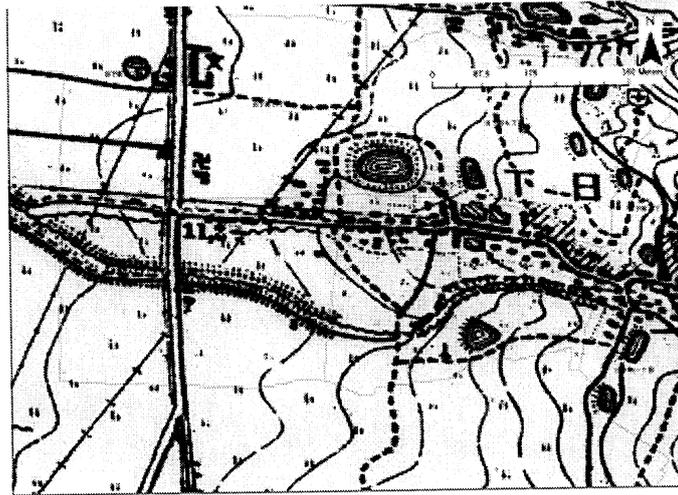


図2 1959年日下町

4.2 幼少時代

「(小学校に入るまでの) 家での役割は、みんな分担されていて、男の人は仕事が役割で家の中のことはすべて女に任されていました。そして私たち子供は、子供なりに分担があって、朝起きて学校に行くまでに掃き掃除、家のなかの掃除、拭き掃除は子供に任されていました。それとお風呂の水を運ぶこととか、お風呂を沸かすことなどは子供の仕事でした。今考えると、子供は子供なりに責任をもって任されていたので、絶対にそれをしなければならぬというのではありません。」

「(家の仕事が私にも分担されるようになったのは) 幼稚園の年少ぐらいから任されてて、ヘタクソでもいいから落ち葉をひらって、ちりとりに入れる方法とか、弟とペアになってセットでする方法とか何回も何回も遊びをもって教えられました。おばあちゃんが『こういうふうにするねんで』って遊びをもって、そして『これはあなたたちの役割よ』って言う感じで自然と役割が決められていく。」

「男の人が教えるということにはなかった。男の人はほうきをもったり、そういうことは絶対しない。だから子守も、女の人は赤ちゃんを抱くけど、男の人が赤ちゃんを抱いて人前に出るってことは絶対ない。」

「はじめは『こういうふうには掃いたらちりとりに入るね、ひとりでできるかな?』って今考えたらうまいことやらされてたんかなって思う。やらされてるんじゃなくて、遊びで、『上手に掃いたね』って感じで教えられて、『次からこれがあんたの役割にするね』って言われたら、小さいころは家のなかで『これが私の仕事だ』っていうのがあったから、仕事

ができたみたいでうれしかった。家に檜の木があったから、どんぐりがぼろぼろ落ちるのをひらってたら、『1回掃いてみいひん?』っていうことになった。だんだん上手になっていった。」

「そして私がいぶできるよになつたら、(落ち葉の掃除は)妹に任せて、私は上の掃き掃除(を練習するよになつた)。教えるのはやっぱりおばあちゃん。2番目のBさんはしない。やってたのは私と妹のCさんだけ。そこから私は座敷の掃除とか、仏さんの掃除とかを教えてもらうわけ。」

K家では、男女の役割分担が明確に決められていた。そのため、部屋のなかで子供を抱くことはあっても、男の人が赤ちゃんを抱いて人前に出ることは絶対になかったことである。しかし、筆者が産まれたときにAさんの父が筆者を抱いて外に出たため、お祝いに来られた人から非常にびっくりされたようである。

4.3 小学校時代

「だんだん力が付いてくると、井戸から水を汲んで、お風呂の水汲みをやった。それは弟もやってた。水汲みやったら男の子やし、力もあるし。ほうきは男の人にはもたせないっていうのがあった。だからもってない。男の人が掃いてる掃除の姿ってのはいけないっていうの(があった)。なんか男の人がそういうのをしているのは恥ずかしいことで、(そんなことをさせるのは)女の人の恥でもあると聞いた。」

「だんだん大きくなってきたら、それ(分担された役割)が私の仕事だという(意識)があるから、夕方になったら早く帰らないとお風呂の準備ができない。だから時間を見て、夕暮れ時になったらあわてて帰る。」

「(お風呂の水運びの次に任されたのは)お風呂を炊くこと。薪で炊くから、その薪割り、それを教えてくれたのもおばあちゃん。薪割りは弟のBさんもする。でもお風呂を炊くのは私と妹だけ。それは決められていた。お風呂に入る順番はおじいちゃんが一番最初。次は父さんで、その次は父さんの兄弟。それからお手伝いに来てくれてはる人。そのひとらが全部終わってから、おばあちゃんが入る。その次は父さんの妹、そんで私ら(子供)がきて、最後に母さん。Bさんは男のなかで父さんの次に入った。嫁が一番最後。男の人と女の人の差がすごかった。」

「お風呂の湯をみるのに、男の人は(格式があるから)そこに座ってることができないから、女の人の私かCさんがそこにいて、ぬるかったら追い炊きする。で、熱かったら

水を運ぶ。お風呂が終わるまではだいたいずっとその位置にいてんねん。」

「今みたいに電気がついてないから、夏場は仕事を遅くまでやって、冬場は早く終わるから、その時間帯になったら、早く帰って用意しないとイケない。そしてごはんが終わったくらいから私は炊くところに座って『熱い?』とか『いける?』とかずっと聞いてた。(みんながお風呂に入ってる間) ずっとそこに座った。けどその間に焼き芋焼いたりしてた。」

「全員入り終わるまで 1 時間半ぐらい。そんなにゆっくり入ってる人はいてない。だから今みたいに 1 人が温泉気分で 30 分とかじゃなしに、カラスの行水に近い状態。みんな早かったから 1 時間半以内で終わってたと思う。何せ、焼き芋を入れて、最後にちょうどきあがるくらいやった。」

「お風呂場があってお風呂場の出口のところに、おじいちゃんが(風呂から)出てくる前におじいちゃんの浴衣を置いて、次の人が入り終わったら、また次の人の浴衣を順番に置きに行く。それはおばあちゃんの仕事。私はずっと風呂焚きで座ってるから。だから知らん間に役割分担っていうのはきれいにできてた。お母さんとお父さんの妹が食事の後片付けしてる間に、おばあちゃんはお風呂の浴衣を順番に用意してるし、私らはお風呂を焚いてるし、サイクルがあって、無駄な時間がないっていうの、効率的にすすんでる。」

当時の K 家では、家のなかのことは全て女性の仕事であった。そして、女性のなかでさらに役割分担があったわけだが、それに対して A さんは、無駄な時間がなく効率的であるため、違和感を感じなかったことが語りのなかからうかがえる。

K 家の周囲の家が、それぞれどのようなやり方で生活をしていたのかは不明であるが、今のようにあちこちに電気がついていないため、夕方になるとみんな家に帰っていたようである。

4.4 中学校時代

「中学のころ女の子は家庭科で男の子は技術で一緒にすることはなかった。私が中学 3 年のころはそうやったけど、C さんのときは変わってん。一緒にして技術家庭というのになった。だから私のときはずっと別々やった。」

「それと運動会。給食はあったけど、運動会の日親がマットをひいて、一緒に食べた。でもそれがやはり親が日曜日にこられない職業のお母さんとかがいてるから、家の商売やったらいつ休んでもいいけど、会社に行ってはる人は休みの日が決まってるから運動会にこられないのがあって、食べるときは親と子供がばらばらになった。」

4.5 K家での出産

「私は、家の仏さんの間で産婆さんに来てもらって生まれました。二年後の弟のときになると、その産婆さんが産院を建てはったのか借りはったのか分からないねんけど、そこ（産院）で（産婆さんが）事業をしはるようになったから、そこ（産院）に産むまで母さんが通ってた。その建物は、今の建売ぐらいの大きさに二階建ての細長い建物やった。たいした設備じゃなかったけど、その人（産婆さん）が事業をするようになったから、周り（産婆さんに）来てもらうんじゃないかと、自分らが通うようになった。妹のときも同じ産婆さんのところに母さんは通ってた。」

「下（一階）で受付と治療室みたいなのがあって、二階が今で言う病室があった。でも、それ（病室）はふすまで仕切られてて、二部屋しかなかった。家でお産やったら、周りが動いてるから神経的に休んでられないけど、そこ（産院）だと三日間ゆっくりと体を休められるから、妹のときも母さんは産院で出産したんやと思う。」

「家でお産やったらテレビの時代劇みたいな感じでめっちゃたいへんやと思う。それに、産婆さんも年いってきたらあちこち自転車乗ってお産にかけつけるより、来てもらうほうが楽やから産院を開かはったんとちゃうかな？ それとな、男の子を産んだらゆっくり大きな顔をして休んでればいから女の子と男の子どちらを産むかによって、気持ち的にも違うと思う。その差は、すごい大きかったと思う。今の皇室みたいに……。男子が継承するっていうのが強かった。よく、妹は、『兄ちゃんだけは特別扱いやもん』って今でも言ってる。」

「たぶん、周りの家も家じゃなく産院で産まはるようになったんとちゃうかな？ 昭和30年代は、めちゃめちゃ人口の増えたときやねん。だから、産婆さんも産院を開いて事業をやったほうが体力的にも経営的にも有利やったんとちゃうかな？」

出産をする場所が、家から産院に移行した。その背景には、出産をする側もそれを受け入れる側も家よりも産院で出産するほうが、お互いにとって好都合であったため、すんなりと移行したものと上記の語りから考えられる。

4.6 K家での死

「私のおじいちゃんは、私が大学1年のときに亡くなってん。人口が増えたら病院も増える。でも、その病院は外科と内科で分かれてた。今のような総合病院は大阪市内に行か

なければなかった。だから、入院するとなったら市内に行かんとあかんかった。昔のおじいさんの世代は『家で死にたい』ってよく言ってやった。だから、おじいさんは死ぬときまで自宅にいた。それで、往診に毎日、来てもらってた。おじいちゃんは、仏さんの間でベッドを置いて寝ていた。(おじいちゃんが) 死んだときも仏さんの前に死体を置いてお通夜をやってた。」

Aさんは、人の生まれるとき・死ぬときは仏間で行われるのだろうか？とっていたようである。

「おばあちゃんが死んだのは、麻佑(筆者)が小学校1年生のときやったと思う。おばあさんのときは、腎臓障害でむくみがあったから病院に入院した。このときは、(家の)近くでも総合病院や救急病院ができてたから家で面倒をみる人はなくなって、入院するのがあたり前になってた。設備もみんな整ってて家で見るより安心やからそうだったんやと思う。周りは病院のほうが安心やけど、本人(おばあちゃん)は私が病院にお見舞いに行ったら、いつも『帰るから靴出して』って言ってた。だから、本人(おばあちゃん)は最期は家で過ごしたかったんやと思う。(おばあちゃんが)『帰りたい、帰りたい』って言ってた。病院やから命を延ばすことができるけど家やったらそこまでのことはできないから、辛い面もあったよ。」

「父さんが死んだのは、神戸の震災があった1995年の11月17日やった。父さんのときも(亡くなったのは)病院やった。でも、父さんは自分自身、家やったら無理なのを分かってたから、しんどくなってどうもいかなかった最期のときは、家に帰るんじゃなくて、『病院に帰る』って言った。だから、家で最期を迎えたいって思うのはおじいさん・おばあさんの世代までとちゃうかな？父さんは、病院に行ったら命を助けてもらえるって思ってたから『病院に帰る』って言ったんとちゃうかな？おじいちゃんもおばあちゃんも命を助けてもらいたいとかあまり思っていないような感じやって、とにかく、家に帰りたがってた。だから、その考え方の違いちゃうかな？って思う。」

祖父・祖母は、死ぬ間際、家に帰りたがったようであるが、父は家に帰りたがらなかった。その違いは世代の違いによる死に対する考え方の違いではないだろうか？とAさんは捉えている。

4.7 お葬式の形態の変化

「昔は人が亡くなったらぜんぜん知らん人にも来てもらおうやん。そんな人にも食事をふ

るまったりしてたわけやん。そしたらみんなに集まってもらわなきゃいけないからうちでも隣組があるやん。でも今は会館ができてから必要ないやん。」

「お通夜だけでも前までうちでしたやん。1日だけは家族のなかにいるわけやん。でも次の日の葬式は、あれは会館に帰っちゃうから。お葬式の形態が変わったらもっとばらばらになるのかなって。そんなん結束してる意味もないし、仏間もいらなくなるかなって私は勝手に思ってるけど。隣組とかどこでもあったけど用がなくなるっていうの、業者さんに頼んだらすべてやってくれはって、負担が少ないっていうの。だからおじいさんのときは葬儀屋さんってのはあんまり関係なかったのかなって。全部自分のところでやってたわけやん。だから隣組とか親族の結束は強かったと思う。」

「新しく入ってきた人は隣組とか入ってなかったと思う。それで今までやったら自給自足の生活をしてたから、なんかあったら、死ぬときはまわりに手伝ってもらわないとできないっていうの。だから結束が強かったのかなと思う。新しく来た人は若いやんか、おじいさん、おばあさんを連れてってのはなかったと思う。だから次男とか三男とかが新しく建売の家に来たんだと思う。」

1970年代、K家の周囲にたくさんの建売の家が建ち、人口が増加した。そのため、周囲には夫婦・子供の核家族が増えたようである。

4.8 本家での集まり・話し合い

「昔は本家と分家がすごくきれいに分かれてたから、本家のところは（うちみたいなのが）当たり前な生活やった。本家やったら隠居してはる人までいるから、そういう生活やけど分家やったら人数が少ないからもうちょっと楽やと思うけど。」

「うちは本家の本家やから人数が多いし、うちの実家の両隣はおじいさんの兄弟がいるから。だから何かあったときは、おじいさんが大声上げたら、一遍にみんな集まる。それが嫌やったっていうのがある。周りが何も無いから大きい声を上げたら『いったい何があったんだ』という感じですぐに（人が集まる）。」

「今までにあったことを少し変えとかそういうことがあった場合は法事状態。何かあったときにはいつも話し合いに30人ぐらい寄ってたんかな。話し合いを仕切るのはおじいちゃん。おじいちゃんは本家やったから仏さんの真ん前にどんと座ってて、周りにおじいちゃんの兄弟が並ぶやん。順番もそう決まってるねん。話し合いするときも男の人らのなかで上座下座は決まってる。で、本家のおじいちゃんが全部取り仕切っていく。」

「だからおじいさんが途中で病気で（具合が）悪くなって入院するときも全員に寄ってもらった。おじいさんは仏さんの前に布団をひいて横たわってるわけ、その前に（親戚一同が）全部おって、どこの病院にするか話し合ってた。入院するのにどこがいいのか、一応全員の意見を聞かなければならないからって。」

「あれは私が中学校くらいのときやったかな、おじいちゃんが倒れたのは。そのときに全員が寄ってきたから私にとってはちょっと意味不明な状態やった。これまで（何かあったときは寄ることが）当たり前やと思ってたけど、自分がある程度の年代になってきたときに、家の制度っていうのを家族だけで決めればいいのか、一応家の外に出た人まで来てもらって、全員でどこの病院に行くかを決めなければいけないのかに疑問をもった。」

「その話し合いのなかで女の人と一緒に入ってことはない。だから会議みたいなかたちで集まってくれへんかっていうときは男の人だけ（が来る）。だから女の人もししゃべって揉め事があった場合は、おじいさんよく言っててん、『それはあの人のおしゃべりやから。家の意見じゃありません。家の意見を言うのは男です』って。それで終わってた。だからおしゃべりしはった人に対してはその旦那さんと呼んでおじいさんが少し気を付けろっていうことを言ってた。だから女の人には直接言わない。男の人に言って注意する。」

Aさんは、祖父が病気で具合が悪くなり、どこの病院で入院するのか、親戚一同が集まって話し合いをしているのを見て、不思議に感じたようである。どこで入院するのかは、本人の意見を聞くのが当たり前であって、しんどいときに全員集まって話し合いをすること自体、間違っているのではないかと考えたようである。

4.9 お盆・お正月・お彼岸

「わりと法事とかはきっちりとするから集まる機会が多い。おじいさんの兄弟が8人で、お父さんの兄弟も8人、数が多いから30人ぐらいはいつも集まってた。それが年に何回もある。それにお盆、お正月、お彼岸には全部ご挨拶に来る。そこに食事を食べてもらって帰るから、昼の分と夜の分と2回、だからご飯屋さんみたい。」

「集まるときはひとりずつ台付きの御膳があるねんで。男の人は台でも高い台やねん。女の人がきはった場合は低い台になんねん。大きさも違うし、高さも違う。『こっちは女の人の賄いやから、こっちは男の人の膳やから別やで』って言われて。」

「料理の内容も変わる。男の人のほうが立派。お頭付きの魚で赤飯きて、お汁きて、煮物きて、全部くるやん。でも女の方は赤飯は付けへん。ふつうのご飯になるし、煮物とお

魚にしてもかたち1匹というのにはなかったもん。」

行事ごとに大勢の人がK家に訪れるため、お正月やお盆は外出しないように言われたようである。お茶を入れたり、接待だけでもたいへんであるため、Aさんは行事ごとがあるときは家にいて、手伝っていたようである。

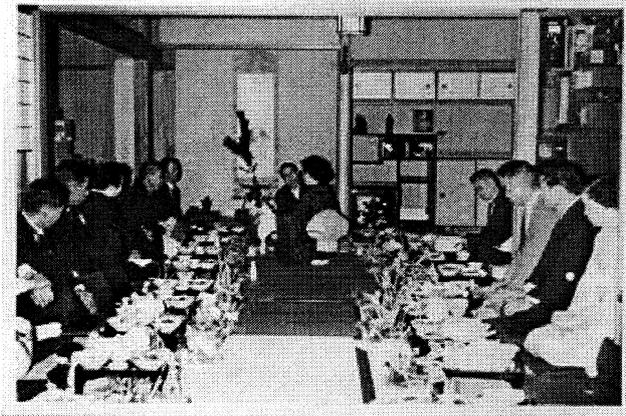


写真 1

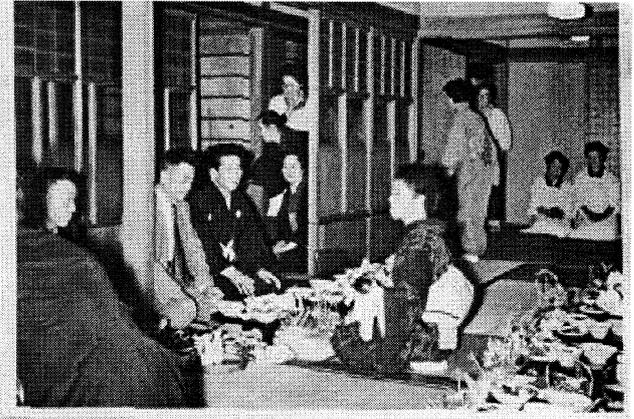


写真 2

写真 1、2 は A さんが生まれる前の K 家で行われた結婚式の写真である。K 家では結婚式などの際には銘々膳を用いた食事をしていたことがわかる。

4.10 東大阪市の誕生による変化

「(東大阪市が合併してから) 住所がそれまで枚岡市だったのが東大阪市に代わって、それまで番地がおおまかだったのが、隣近所がみんな同じ(番地) やってん、だから私の家の両隣は全部おじいさんの兄弟だったから、同じ苗字やから郵便物が間違えて入ってることも多かった。番地が細かく分かれていなかったのが、何丁目、何番、何号までできるようになった。それまでは番地だけで終わりだった。」

「道路が広がっていったってことと、建売が増えてきたってことと、上水道と下水道が整備されはじめた。建売とかは上水道とか下水道ができた上に建物が建つから、水洗トイレがあってガスとかもぜんぜん違った。でも私らのところは集落のなかにあるから道が狭くて、上水道・下水道に代えようと思っても、立ち退いて道幅を広くしなあかんとなった。東大阪市になることによって道の整備をしてくれはるようになって、それによって水道とかが(地面から) 見えてたのが埋め込みになって道幅が広がる。」

「私たちは今まではぼっとなのトイレやったのが水洗トイレに代わった。上水道・下水

道の整備がされてから、道路の道幅が広がって、トイレが水洗トイレになった。水洗トイレになってトイレが家のなかになった。」

「それまでは井戸水で賄ってた。洗い物とかそういうのは井戸水を使ってた。水道は食事のときぐらいやった。昔はほとんどの家が井戸水を使っててんけど、東大阪市の合併のときぐらいに保健所がきて、井戸水がほんとに飲んでいい水かどうかを検査するというのがあったん。東大阪市の日下町にはあんだけ井戸水があったのに3軒だけOKでほかは全部ベケやってん。うちもベケ、でもうちは飲んではいなかったん。洗い物に使ってたから。だからそういうのも市が大きくなってきたら管轄が決められて、水道局とかそういうのあるやんか。それまでは集落のなかやったら水利組合とか、住んでる人だけで水を使うのをどれぐらいにするとか、農家のことが関係するから、何日から何日までは田んぼに水を引く日とかを決めてたのが水利組合で、だから細菌がいるとかばい菌がいるとかは何にも検査してなかった。けど東大阪市になると水道局とか、保健所とか管轄がきちっとなるからそういうのを見てまわらはったんかなと思う。」

「(道路の幅が広がって) 交通量は増えた。それまで集落やったら道幅が狭いから家の前までこれなかった。だから別の位置に車を置いて歩いて帰らなければならなかったのに、道幅が広がったら車を買う人も多くなる。家の前の道が車よりも狭かったら入られへんから、それを広げてもらうことでみんな自分の家で車を買おうということになるやん。小学校のころに道路が広がったことで自家用車を買った。それまでは3輪車、トラックでも3輪やねん。」

「(建売が増えてからの転校生は) 四国とか九州が多かった。どっちにしろ四国とか九州は長男だけを残して次男とか三男を出すという感じやから、もうそのまま仕事がいっぱいある大阪に向けて(やってきた)。でも大阪市内は値段が高いやん。(東大阪は) 今でいったらベッドタウンになるからいっぱい建売がたったんやと思う。山を越すとなったらたいへんやけど、山を越す以前のこのへんが一番いいっていうの。新しく入ってきた人は本町とか梅田に遊びにいった人がほとんどやった。」

「そして塀もつくるようになったな。これまでは塀もなく家だけがぼつんとあった。木を植えて、木がその領地という感じやったのに塀をつくりだしたな。一戸建てのところは、塀があってここからここまでは私の敷地ですよってなってたけど、私らのところは隣近所どこで切れるのって感じで行ったり来たりしてた。一応木は植えてるけど木の間からみんな出入りしてるわけやねん。それが塀ができれば玄関からしか入れへんやん。だ

から隣のおばちゃんとかでも『何か作ったよ』って言いながら木の間から出てきてた。『いてる？』って大きい声で言いはって、『います』って言ったら『入るわな』って、木の間から抜けてきて、どこから入ってくるかわからんようになった。」

「あんまり人口が増えすぎたから用心のため、今まで会う人はみんな知り合いしかないって感じやったけど、それが知り合いじゃない人も家の周りを歩くわけやん。だからそれが不用心になったんかな。だから家の形態も変わったわけやな。ただ木を植えててまわりから見えへんようにするだけじゃなくて、自分とこの囲いをして相手が入られないようにするっていうの、そういうふうな形態に変わった。」

「家が多くなったから電気がすごく明るくなった。石切駅を上ったときに昔は何にもなかったから、難波とかそういうところが電気がぼんぼんと付いてたけど、今はもう住宅地で真っ赤やんか、光だらけで。」

「田んぼが少なくなった分、私らのところは溜池が多かってんけど溜池もなくなった。(田んぼの水引に使ってた)溜池の上に学校を建てたり、建売を建てたりするのに消えていった。」

「住宅地を建てるために山が切り開かれて、地肌が見えてなんか汚くなっていったな。それまでは業者さんが(木を)採ってもよかったけど、自然保護ってのがあったから規制がかかったな。山を切り開くにも限度を超したらいけないっていうの。あわててつくるから土砂崩れとかそこまで考えてないっていうの。規制がある程度かかってたし。生駒石もうち庭園石材業をやってたから、大きい石をいっぱい採っていったら、崩れやすくなんねん。だからそれも規制ができて免許制になった。だから得て楽になった分は自然も破壊されていった。」

「道が広がって流通がすごくなるってことは、発達するのがめまぐるしい。結局は今日スーパーで何つくろうって思っても、道が広くなかったらなかなか運ばれへん。だから新しいもの、新鮮なものがどんどんくるっていうの。」

「東大阪市の枚岡は人口の居住地域としての役割をとっていったからよけい(にそうだと)思う。急いでそういうふうなのをさっさとやっていかなければならないと思う。人に集まってきてもらわれへんかったら、税金を納める人も多くなかったらたいへんやん。人にきてもらえなかったら市はやっていかれへんから、ちょうど近くの吹田に(万博を)やってるんやから仕事をもつ人がうちにきてくれへんかったらこまるから。そのためには家を建てなければいけないし、便利なようにしなければ、交通条件がよくなかったら誰も

行けへんやん。で、交通条件をよくしようと思ったら小学校とかそういう建物も整備しなかったらあかん。やっぱり若い人来てもらわれへんかったら困ることやん。働き手に来てもらおうと思ったら、子供がついてくるから、子供も安心して育てられるところ、そういうふうなところを求めたんちゃうかなと思う。」

「ただ単に大阪市内に住むんやったら自分ら 2 人だけで、子供がない場合やったらそれでもいいけど、やはり子供を育てようと思ったら、学校のこととか環境を考えたら、一番いいのは自分らが動きやすい位置で子供は学校に行かす。そして生活環境が整っている場所。そういうふうな場所を自分らがつくらへんかったら、来てもらわれへんっていうのがあったからちゃうかと思うわ。だからそういう整備が一気に進められていった。時期としてはよかったんちゃうかな、世代交代っていうの。」

昭和 42 年（1967 年）2 月 1 日、「住みたいまち」を合言葉に東大阪市が誕生した。そのため、上記の語りにあるような上下水道の整備や道路の整備などのさまざまな整備が行われ、人口が増加した。その反面、溜池や田畑のような自然が徐々に減少していった。

以下 3 枚の地図は、A さんが K 家で生活してきた日下町周辺の地図である。後で詳しく触れるが、地図の変遷からは A さんが L 家に嫁ぐまでの 23 年間の間に、農村地域であった日下町がベッドタウンへと変化していく様子がうかがえる。



図 3 1969 年日下町



図4 1990年日下町



図5 2001年日下町

4.11 幼少時代の食事風景

「本家だけで食事するときは銘々膳ではない。本家だけで食事するときは、私が小さいときやったら男の人が並んで座るところと、ちょっと下がりて女の人が食べるところがあった。小さいころはテーブルがなくって長机、でも椅子はなかった。だから男の人は男の人ばかりが並んで食事して、女の人でも女の人ばかりが並んで食事して、それも家長から順番だった。男の人は男の人で、女の人で女の人で畳み 1 畳分ぐらい離れてた。段差とかはなくって長い机やけどおじいさん、家長が一番奥やった。その次が父さんになって順番に並ぶのは決まっていた。」

「(食事を) 作る所と食べる所は別だった。作った料理は女の人全員で運んでいく。(料理を) 置いていくときもおじいちゃんから順番に置いていくわけ。」

「今は椅子やからどこに座ってもいいけど、そのときは座る順が決まっていたから、変わることはなかった。食べる時も、だいたいおじいさんの食べる速度に合わせてみんな食べてたと思う。別にそこまで決められてるわけではないけど、おじいさんが『ご馳走様』って言ったら、その少しぐらい後でみんな『ご馳走様』ってなる。食事中は男の人は男の人の席だけやから、仕事の話とかしゃべってはるけど、女は女でこっちでしゃべっておけばいいっていうの。」

「わりとおじいさんは厳しかったから、絶対に好き嫌いを言わせない人やったから、1 個でも嫌いなものがあったら食べへんかったら、『お茶も飲むな』って言った。食事を残すということは絶対に許されへんこと。何としてでも食べやなあかん。だから、私らは残したら

「すごく怖かったから、好き嫌い言えなかった。」

改装が行われるまでは、食事を作る所と食べる所は別であり、男女別々の少し離れた長机で食事をしていた。そして、上座・下座の席順が決まっており、Aさんの祖父が一番奥に座っていた。男性は男性で、女性は女性で席順が決まっていたのである。そして、出来た料理は女性全員で運び、Aさんの祖父から順に料理を置いていく。男性は、一切、家のことはせず、女性に任せていた。食事中は男性は男性で仕事などの話をし、女性は女性で話すというスタイルだった。また、祖父が食べ終わる少し後くらいに全員でご馳走様を言うようになっていた。このことから、近代家族の特徴である、「家長権」や「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」が存在していることが分かる。そのうえ、Aさんの弟であるBさんを跡取りとして大事にしていたことから、跡取りとしての子どもを教育し家を永続させるための家族という色が濃かったと言える。

4.12 一回目の改装

「家の改装は父さんの一番下の兄弟が結婚しはるときに、私がちょうど6年生やったかな、これを機に2階を改装して部屋をつくらうということになった。これまでみんなごった寝という感じやったから。」

「そのときまで1階に寝てたのがおじいちゃんとおばあちゃんやってん。改装やからごみが上から落ちてくることになって、おばあさんらは食事をした部屋で寝ることになってん。結局、食事をするときに布団をどけなあかんことになって、毎回毎回それをするのが嫌やということで、歳もだいぶいってたから、そこをおじいさんとおばあさんの部屋にしといて、そのときにはほかのお父さんの兄弟は嫁いでたから。最後のひとりが結婚して荷だしが終わってから改装してん。これまで自分の部屋がなくて3人一緒に寝てたのを、それをひとりずつの個室にしようとなった。」

「改装でつくるところと食べるところが一緒になるのはあかんっておじいさんとおばあさんは言ってたんやけど。今やったら当たり前やねんけど、つくるところはへつついさんと言って神様がいるところで、その近くで食べるのは(よくない)って言ってた。せやけど毎回掃除して、そこに寝てというのを繰り返すのがえらく(大変に)なってきて、合意したわけ。それでそのときにはじめてテーブルが出てきたわけ。」

「男の人と女の人がばらばらに食べてたのが一緒になってん。なんせ父さんの兄弟が結婚して出て行ってん、だから私ら7人だけになってテーブルになってん。火から一番遠い

ところにいるのがおじいさんと父さんやった。それだけ（上座・下座）だけは分かれててん。これまで男の人と女の人と一緒に座るなんてなかったもん。それが一緒になってん。改装で食べる所とつくる所が一緒になった。」

一回目の改装が行われたのは 1970 年である。K 家では、この改装によって、料理を作る所と食べる所が一緒になり、一つのテーブルで男女がともに食事をするようになった。上座・下座の席順は、依然として残ってはいたものの、それまで男女別々の机で食事をしてきたのが、改装後は、男女が一つのテーブルで食事をするようになったのは大きな変化である。改装後も上座・下座の席順が残っていたことから、「家長権」は依然として存在していたことが分かる。

さて、ここで、一回目の改装が行われたころの日下町の変化を見ていきたいと思う。図 3 は、昭和 44（1969）年の日下町である。10 年前の図 2 と比べて、田畑が減少し、住宅や学校が増加していることが分かる。

4.13 一回目の改装時の周囲の様子

「学校行ったら 1970 年の万博のときから、子供の人数も増えだして。高度成長期の一番いいときやったからみんな農業から離れて会社とかに勤めて、だから吹田のほう行ったら家がいっぱい建ちだしてんやんか。それで私らのほうも増えだして、よそから入ってきた人がいっぱい出したわけ。それで私らは 1 クラスやったのに一気に 3 クラスになってんね。小学校で 2 クラス分増えるといったらすごいもんやと思う。」

「私が小 6 のときに、転校生の子らと一緒に誕生日会をしてん。転校生の家にお呼ばれして行ったら、その子の親の出身地の郷土料理とか、洋食とか、クッキーを出してくれはってん。そこで、初めてクッキーを食べてん。それで、家に帰ってから母さんに『クッキーって知ってる？』て何回も聞いたもん。逆に私の家にも（転校生に）来てもらったよ。それで、母さんに『クッキー作ってくれへん？』て頼んだんやけど、『そんな無理！』て言われて……おまんじゅうやったな。あとな、転校生の子らと一緒に石切神社のお祭りに行ったらよ。『一緒にお祭りに行けへん？』て誘って行った。日下町は石切神社の氏子やからそこ（石切神社）のなかに入るねん。男の子だけ、太鼓台に乗れるねん。あと、8 月 23・24 日にやらはる地藏盆のときもその子ら（転校生）を誘って一緒に行って、配らはお菓子ももらってん。私らが、（転校生を）お祭りとかいろいろ誘うから、向こうの親は仲良くしてもらってるからそのお礼にっていう感じで、お誕生日会に招待してくれはったんとち

ゃうかな？ だから、子どもを媒介にして親同士も仲良くなっていくって言うの。それから考えても子どもは大切やと思う。」

「万博には学校の社会見学で行った。今まで日本しか見てなかったのがよその国を目の当たりにしてびっくりしたな。アメリカ館に行って月の石を見たり。月の石を見るのに半日ぐらいならんできた。でもほかのシンガポールとかいろいろなアジアの国もきてたし、そのときにレストランとかあるやん。よその国の料理を見て、日本だけじゃなくていろいろなものがあるねんなっていうのがわかった。」

「やっぱり万博とかがあったらテレビとか家電製品とかがよく売れるようになるし、一家に一台は置くようになった。それがカラーになったから、まわりの状態がわかったから、自分の置かれてる状態がいいのか悪いのかっていうのがわかってくるから、自分とはまわりより閉じられてるなとか、そういうのを比べるようになった。これが当たり前って思ってたけど、今の日本はこうなってんねんなっていう感動と、自分の家とのギャップを感じた。」

「そのときに会社とかの雇用も多かったと思う。だから私らのほうに家がこんだけ建ったんだと思う。働きに行くために。ちょうど万博があったから、万博のまわりに、今やったら吹田のベッドタウンっていうの、あのあたりに道路工事する人とか、まあ大学を出たえらい人だけじゃなくて、ただの労働力でもそれだけでも雇ってもらえるから、大阪にみんな集まった。」

「2、3年前から道幅を広げていくのと山を切り開いて、その人らが働く場所をつくるのと、それに合わせて業者は高級住宅地とかいう感じで吹田は、そういうふうに建ててたし。働く人やったら私らのほうから行けるし。高速とかができたらみんなはそれに乗って働きに行けばいいねん。一直線で行けるから、そういうのも人口の移動っていうの、働く場所が大阪にあるから九州・四国からいっぱい集まってきてるんじゃないかな。」

1970年に一回目の改装を行ったわけであるが、1967年の東大阪市の合併や1970年の万博などの影響により日下町という地域自体も大きく変化したことが上記の語りから見てとれる。

以下の図6は、日下町全体の地図であるが、Aさんが生活していたK家は二丁目にある。わかりやすいように二丁目部分だけを白抜きにした。図6をもとに図7、図8を見れば、上記の語りにもあったように、日下町二丁目では、1970年から1975年にかけて大幅に人口が増加していることがわかる。

つまり、その時期に外部から来る人が K 家のまわりが増えた。そのため、K 家では塀や鍵を作ったようである。K 家は、庭園石材業を営んでいたため、仕事柄、新築の家の文化に触れる機会が多かった。そのため、自家と新築の家との違いを認識しやすく、新しい文化を取り入れやすい環境にあったと考えられる。1970 年代に建売の新築の家が増えたことによって、仕事上、さまざまな家に出会い、自家との違いを目の当たりにした A さんの祖父は、比較的素直に新しい文化を K 家に取り入れたと考えられる。しかし、新しい文化を取り入れたのは K 家だけではなく、転校生の家も日下町に古くからあるお祭りや地蔵盆に参加することで、日下町の文化を取り入れていったのである。それは、ライフストーリーにあったように、お祭りや地蔵盆に子どもが参加し、お誕生日会などを開きお互いの家を行き来するうちに K 家と転校生の親同士も仲良くなり、そして、お互いの家にそれまでなかった新しい文化が取り入れられていったと考えられる。

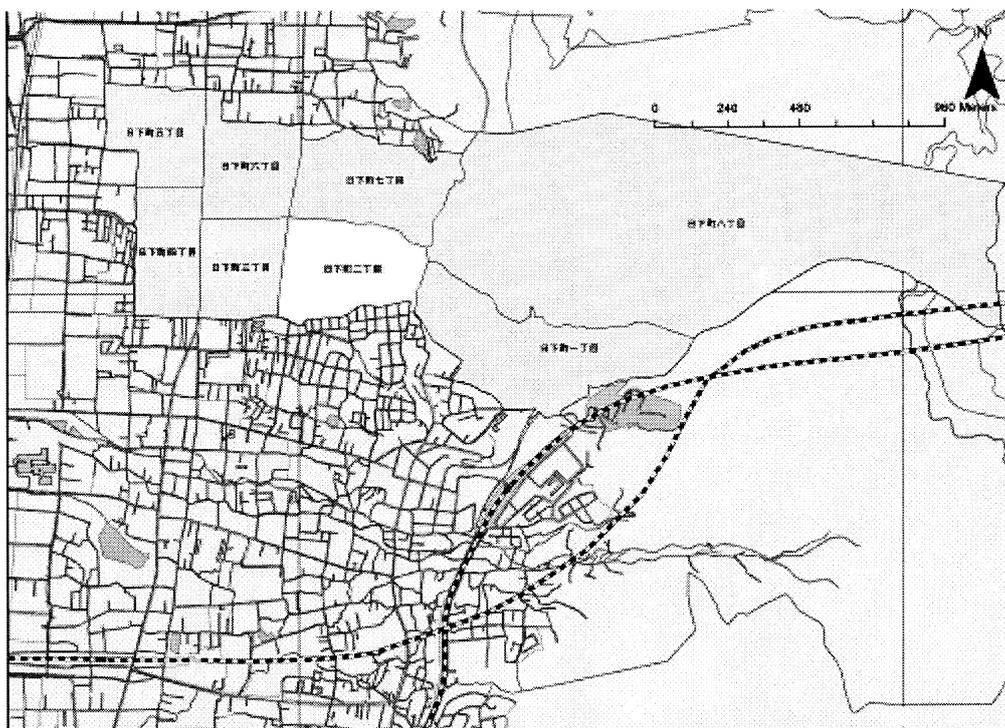


図 6 日下町全体

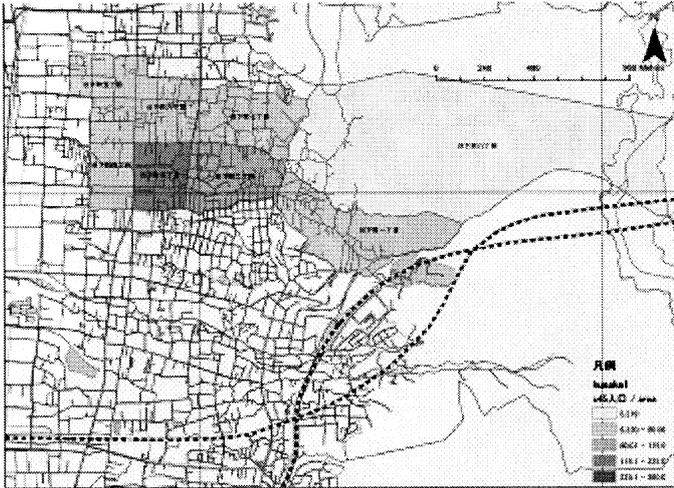


図7 1970年

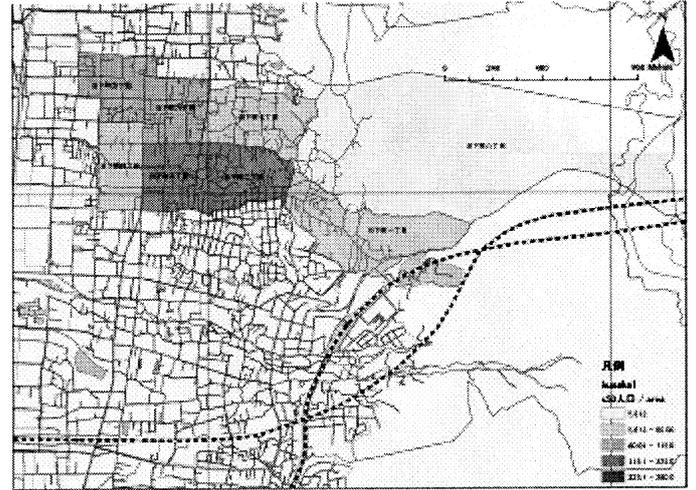


図8 1975年

4.14 祖父の入院

「おじいちゃんが入院してから（家の様子も）全部変わってきた。場所どこに座ってもいいっていうの。おじいさんが1回目入院したのが中学のときで、よくなって1回帰って、高3のときに食道癌で手術してん。半年間入院して死んじゃったから……そのころぐらいから上座・下座がなくなった。」

「おじいさんが入院したやんか、それまで女の人が仕事に入ることはなかったやんか。でも母さんが父さんが働いてる石置き場に事務所を建てた。事務所を建ててそこに母さんは手伝いに行くようになったわけやねん。だから母さんは家の仕事を離れて父さんの仕事に行ったわけやねん。それは1970年代で家が増えるわけやん。家が増えたら庭もいるやん。だからその受注が多くなったわけやねん。」

「それで今まで住み込みでいた人がいなくなったのは車が普及して、みんな自家用車をもつようになるやん。万博とかオリンピックとかがあると道幅を広くしていくやん、そうすると車がだんだん行けるようになるやん。通勤とかも遠いところからもできるようになるねん。だから通いでいけるわけやねん。」

「お母さんが事務所に行ったから、今までは男の人の仕事の中に女の人が入らないというのがあったやん。だから食事にしても男の人は男の人の机やってん。でも女の人仕事の内容がわかってくるやん。だから話が対等になってくるから、男の人は男の人、女の方は女の人、それが崩れてきたのかな。」

「事務所を建てたのはおじいちゃんが入院する前後ぐらい。（家のなかの仕事は）かあさ

んが抜けたから、私とおばあちゃんがするようになった。みんなの賄いをするにしても家族の分だけやから楽になってん。それに改装によってお風呂もガスになってん。だから点火するだけ。だから私とおばあちゃんだけでも食事の賄いができるようになった。それで流しも外に出なくてよくて、家のなかにそれが据え付けられていて、それで人数が少なくても家のなかはまわっていける。」

1976年に祖父が入院し、そのころぐらいに、事務所を建て、そこにAさんの母が手伝いに行くようになった。つまり、それまでは、「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」が存在していたが、Aさんの母が家を離れて事務所に行くことによって女性も仕事の内容が分かり話が対等になって、「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」が崩れてきたと言える。つまり、祖父の入院によって、今まで家長として取り仕切っていた人が家に居なくなったため、上座・下座という席順や明確な男女の仕事の分離は、少し揺らいだようである。

4.15 祖父の他界

「改装してテーブルになってからは、おじいさんもだいぶ丸くなって、男女問わずいっしょにしゃべれるようになった。おじいちゃんが亡くなったのは大学1年のとき。(おじいさんが亡くなってからは)誰も男の仕事、女の仕事っていうのを言わなくなった。洗濯機とかができて、時間には余裕が出てきたが、知らん間に自分の時間をもつようになった、テレビ見てたり(もするようになった)。それまでテレビはおじいさんと一緒に見てることはあるわけ。おじいさんがいてないときにこそっと見ることはあるけど、おじいさんがそのへんをうろうろしてるときにポーっと見てることは絶対ないねん。暇かって言われて用事をいいつけられんねん。」

4.16 父の入院

「おじいさんが死んでから、2ヶ月後ぐらいに父さんが入院したんかな。1ヶ月ぐらいでそのときは帰ってん。そこからパン食になってん。入院したときに父さんはパン食やったから、帰ってからもそうするって言ってパンと牛乳にして、牛乳屋さんに瓶を運んでもらうようになってん。だから今までなかったパンがうちにはじめて出だしてん。」

「パンとチーズと牛乳と果物、前までは朝からお粥を炊いたり味噌汁をしてたのがすごく楽になってん。それに合わせてトースターを買ったわけ。それで男の人も台所に立つよ

うになったわけ。お父さんは自分でパンを焼いてはったもん。母さん寝てたもん。」

「全員でいただきますっていうのもなかった。母さんが起きない。第一、私らも高校生になって、行く場所によって起きる時間が違うねん。私は小阪やから1時間で行けるねん。でもBさんは天理やから2時間半かかんねん。起きる時間がみんなまちまちやから自分の時間に合わせて、パン食やから自分のことは自分でしてねってなんねん。」

「子供も近くじゃなくて、行く学校によって登校時間が違うねん。中学まで一緒やってん。高校はCさんとは一緒。でもBさんは高校から天理やから。それで始まるのが8時やねん。早めに行って宗教で踊るのがあんなねん。だから実際に高校が始まるのは9時やねん。1時間は参拝みたいな。それが無駄やねんって言って怒ってた。大学に入ってもクラブとかあるからみんなばらばらやった。」

「だから今までの家制度はみんな近くにいる、近くやったら時間が決まってるやん。でも子供が成長してきたら時間帯が変わるわけ。子供は子供の時間帯ができるわけ。前までやったら家族の時間帯のなかに子供は組み込まれてたわけやけど、子供の時間帯ができるから子供に合わず、今の人はそうちがうの。だから夕食でも一応父さんの時間帯には合わす。後から帰ってきたものには、(食事に)かごをかぶせておいて、それをどけて食べる。やっぱりおじいさんがいてるかいてないかですごく違うと思うわ。」

父は自身の入院によってパンに出会い、退院してからパン食をK家に取り入れた。そして、それはその当時のAさんたちきょうだいの時間帯がバラバラであるという状況とうまく合致し、素直に受け入れられたのである。

4.17 二回目の改装

「改装はもう1回、台所の。2回目の改装は大学の2回か3回のころ。2回目の改装は、父さんと母さんの、はなれが建ってるやん、あれをあこにもって行ってん。私ら3人は上(2階)にいてたわけ。父さんと母さんは一緒にいてないねん。2回目の改装の前は部屋が2つになっててん。それを2回目の改装のときは、それを全部つぶして、今の状態になってん。」

「それともうひとつ、応接間をつくってん。それと台所をきれいにしなおして、食器棚とかも付けて今風にしなおしてん。今までダンスみたいな食器棚やったのを、扉付きのにかわってん。はなれを壊して、台所の改装と応接間をつくった。」

「今まで何かあったら全員が寄ったわけやん。全員が寄ろうと思ったらでっかい部屋が

いるわけやん。でも、だんだんおじいさんの兄弟も減ってくるやん。お正月とお盆と法事のときは全員が寄らはるわけやん。でも、ほかの用で来るときはみんなばらばらで来るようになったわけ。ちょっとした人やったら応接間でいけるわけ。台所の横にもっていくほうが楽やん。そんで仕出し屋さんというのもできてん。そうすると食べ物を家でつくらなくても注文をとればいい。お膳とかもなくていいやん。そんなら台所だけで用が済むねん。これまで仏間でやってたことが応接間でできるようになんねん。」

「そのときは応接間がすごい普及してん。普及というより憧れの的やってん。どんだけ小さくてもシャンゼリアが付いてたわけやねん。それで椅子の生活がすごく流行ったわけやねん。だからそれをつくったっていうのもあるし、人を呼ぶのがそんなに大人数を呼ばなくても、少人数でいける（ようになった）。応接間やったらまあ、あそこに座れるのは10人ぐらいかな。」

「これまでは何でも仏間で取り仕切ってたわけやん。でも（そのころから）ちょっとしたことやったら応接間。結婚式の行事とか大切なときは向こう（仏間）になるけど、ふつうのときやったら応接間で済ますようになった。そこに仕出し屋さんができたから。」

「仕出し屋さんが来るようになったのは、この応接間ができたぐらい、大学ぐらいかな。昔はそんなことはなかった。だから法事とかになると（食事や接待が）私らだけでは賅えないから、父さんの奥さんもお手伝いに来た。そんなら奥さんのご飯もいる。わかる、そうすると大人数で動かなあかん。でも仕出し屋さんができたら、奥さんに来てもらう必要ないねん。本人だけが来たらいいいわけやん。その人さえ来ればいいということになるから人数も半分にカットされるやん。だから今は仏さんの部屋とか使うこともない。」

「仕出し屋さんができてからは人数分頼んで当日にお茶を運べばよくなったからすごく台所の役目が変わった。前までは煮炊きがたいへんやったから、だから食べるところとつくるところを別にしてたんやと思う。みんなお盆をもって、流れ作業みたいに動いていくやんか。そんなところにテーブルがあつたら邪魔になるやん。」

「二回目の改装をしてからは上座・下座とかの座り方はなくなって、ほんとに今の状態やんな。みんな子供が帰ってこなくやったやん、クラブとかで。だからみんな（食事が）ばらばらになっていった。電気ができて、遅い時間帯まで仕事に行ったりしたから、だからみんな食べる時間がばらばらになった。」

二回目の改装が行われたのは、1978年である。この改装によって、台所の改装と応接間をつくった。それまでは、どんなときでも仏間で祖父が取り仕切っていたのだが、このこ

ろにはその祖父は他界しており、祖父のきょうだい数も減っていたため、普段は応接間で済ますようになった。また、この改装後から、上座・下座の席順はなくなり、今まで、全員そろって食事をしていたのがばらばらになった。食事をする時間がばらばらになった理由は、子どもがクラブなどで遅くなるようになり、電気照明ができたことによって遅い時間帯まで父が仕事に行くようになったからである。中学までは子ども3人とも家の近くの学校に通っていたが、高校からは学校がばらばらになったため、家を出る時間も帰る時間もばらばらになったのである。このころから、「子ども中心主義」が見られるようになったと考えられる。また、上座・下座の席順がなくなったことから、「家長権」については縮小もしくは消滅したと考えられる。

さて、次に、二回目の改装が行われたころの日下町の様子を見ていきたいと思う。図4は、平成2(1990)年の日下町である。改装が行われた年とは少し間が開くのであるが、図3と比べて、田畑は激減し、住宅や学校が激増しているのが一目で分かるだろう。

4.18 二回目の改装時の周囲の様子

「1970年代に入って、人口が増えて、車が普及しだすやんか、お店とか庭がいっぱいできるから、でも品物が無い、品物さえあれば売れたっていう時代だった。」

「家が増えたら庭があるわけ。1970年の万博で日本庭園がすごい見直されてん。ほんなら誰も彼もが日本庭園のちっこい版をつくるようになってん。今まで外国の人は日本にこないわけやん。(でも万博で)日本に来たら代表的なものをつくってるわけやん。その日本庭園が評価されて、やっぱり日本人は日本庭園やというのがあったから、洋館建てでも日本庭園をつくってた。高度成長期で、車とか便利になるやん、便利になったらある程度のところまで仕事に行けるわけやん。」

「なんせ(そのころは)学校のクラスが増えた。校舎が一階建てやったんが三階建てになったんかな。1クラスやったのが3クラスになったから。田んぼが減って、建売が建ってきた。だから建売業者が田とか畑を買い取って建売を建てていくわけやん。そしたら人口が増えていって、そしたら学校も1クラスから3クラスに急激に増えていって。これまで家の手伝いをしていた次男坊、三男坊は財産わけでもらった土地を売って、(大阪)市内に行った人が多かったと思う。」

「新築の家がどんどん増えていって、田んぼや畑が減っていった。だから転校生が増えだして、その子の家に遊びにいったら、新しい家で別世界(みたいだった)。そしてそこに

は洋式トイレがあって、だけど私は洋式トイレの仕方がわからなくて、どうしてするんやろうって向こうの人に聞いてびっくりされた。それまでトイレは外にあったのに、(家の)中にあるのはなんて楽なんだろうと思った。6年のとき、一回目の改装でトイレが家のなかに入った。」

「人が増えてきたら、やっぱり自給自足というわけにいかないからスーパーができてくるわけ。そんでお米もないし自給自足できない。建売がいっぱい建ってきたら、売りに来るんじゃないし、建売のなかの1間貸しで、そこでいつも飲み物とか売ようになった。だから衣料品は売ってないけど、乾物屋さんと果物屋さん八百屋さんがひつついたようなのが出てきた。で、建売の人はそこに買いに行くようになった。それで、私らも1週間に1回、売りに来るのを待ってなくてもそこで買えるようになった。そこにいったら駄菓子みたいなのも売ってたわけ。」

上記の語りにあったように、1970年代に入って、Aさんの学校では1クラスから3クラスになり、校舎が一階建てから三階建てになった。また、建売業者が田畑を買い取って建売の家を建て、人口が増加していった。それによって、Aさんの周りには転校生が増えだし、その転校生の家で洋式トイレなどの新しい文化に出会ったのである。そして、その洋式トイレが二回目の改装でK家にも設置されたことから、転校生の家出会った新しい文化の影響を受けていることが分かる。しかし、それはライフヒストリーにもあったように、K家と転校生の家の双方がお互いに影響を及ぼしあっているのである。

4.19 二回目の改装後の周囲の様子

「そうしてるうちにどんどん家が増えてきたわけ。そうすると前まで一戸建ての家やったのがマンションが建ちだして。それは私が大学を卒業してからだと思う。卒業するころには小学校がひとつでは足りなくなってもう1個できてん。第2小学校ができたわけ。それも建売じゃなくて、狭いところに何人も住めるマンションができた。それとともに、ほんとに大きいスーパーができた。スーパーっていっても、建物のなかで八百屋さん、肉屋さんて分かれたスーパーだった。で、家が増えだすとバスがついてん。バスがきたら、人の輸送ができるわけやん。それまでは道自体が小さかったからバスが通れるような道じゃなかった。小学校も増えたし、中学校も増えてん。もう1個増えてん。」

建売の家が増え、人口が増えることによって、学校数が増えたり、マンションや大型スーパーができたりした。つまり、1970~1980年にかけて日下町の様子は大きく変化したよ

うである。

以下の図 9、図 10 を見ると、K 家で二回目の改装があった年以降も日下町の人口が増えていることが分かるだろう。しかし、図 11 から図 14 までを見てもわかるように、1990 年代以降は、大きな人口の変化は見られず、多少の増減を繰り返しながら横ばいを続けている。

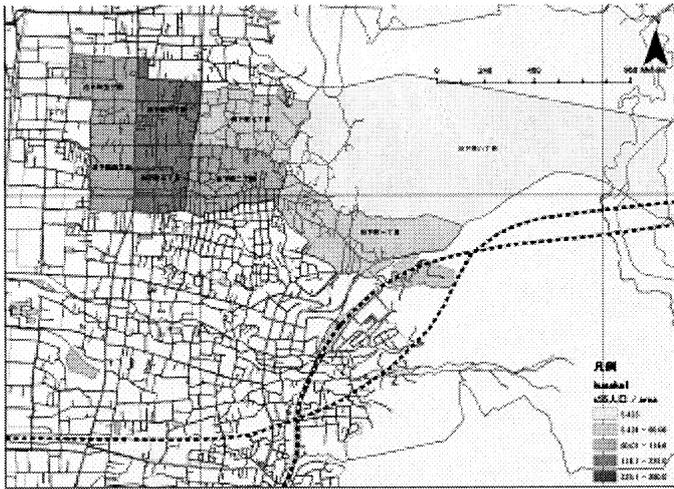


図 9 1980 年

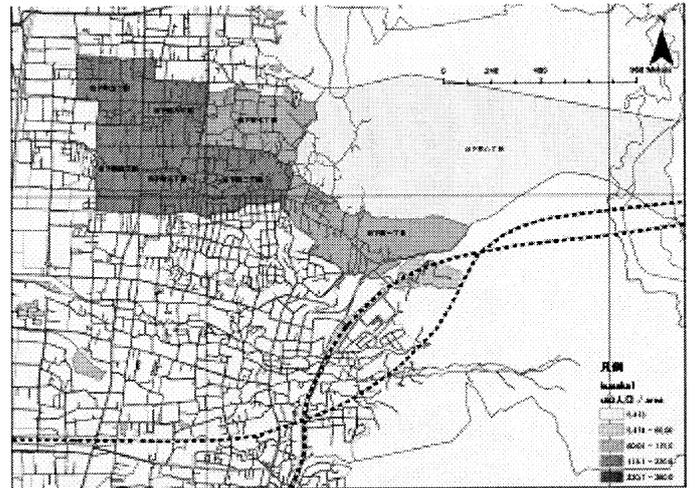


図 10 1985 年

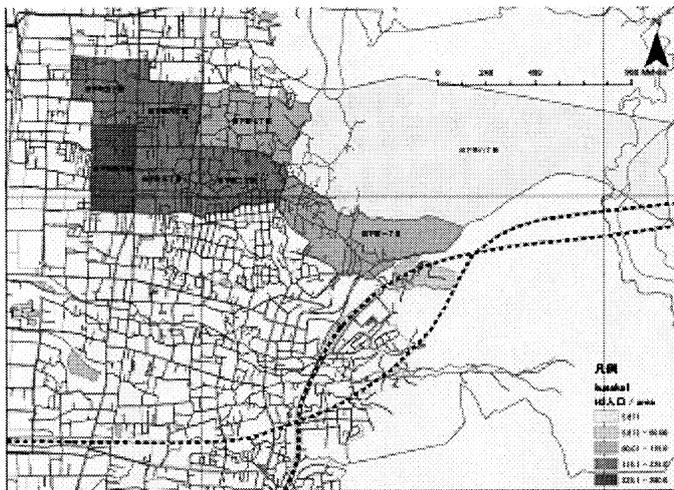


図 11 1990 年

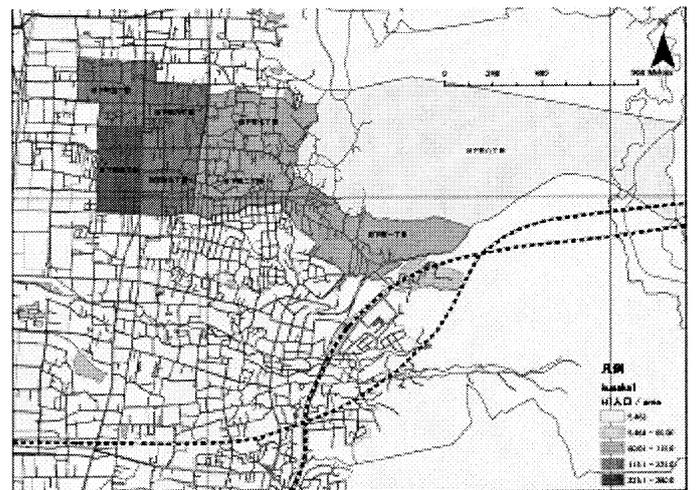


図 12 1995 年

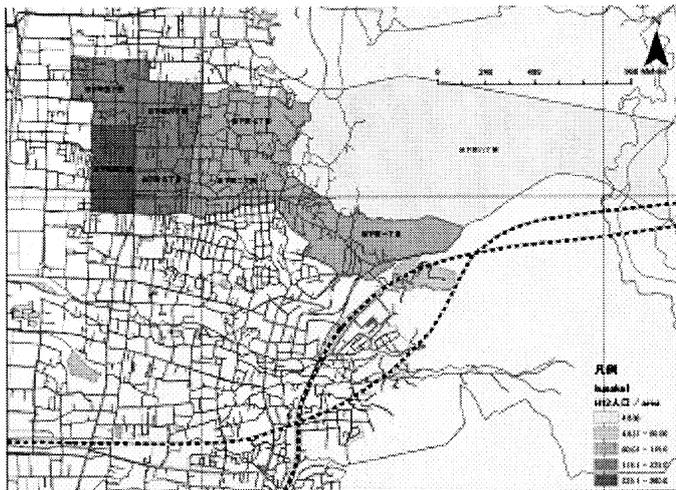


図 13 2000年

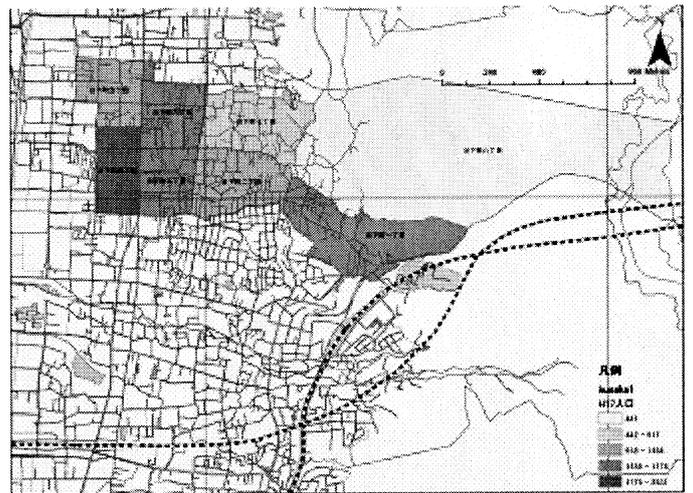


図 14 2005年

4.20 テレビの普及

「テレビの普及とかで、料理も今までの煮込み料理とかだけじゃなくて、いろいろな料理がわかってくるし、それまで和食のみやったのがだんだんいろんな料理がでてきて、それで自分とこで作ったものだけではその料理はできない。そうそうそれで6年のときに給食がはじまった。給食がはじまったから、洋食の材料とかはふつうの畑ではできないから、お肉とかそういうのもだんだん普及していった。それで洋食化と給食で私はいつもわくわくしながら食べてた。」

「一番はじめにテレビを買ったときは食事をする場所に置いてた。真正面に足つきテレビを置いてた。でも、食事をするときはテレビを消してて、絶対、見なかった。食事が終わったらつける。食事の前は、忙しいから見ている暇がない。食事をしながら見ることは行儀が悪いという考えをおじいちゃんも持っていたから。テレビを見ながら食べてたら作ってくれた人への感謝と食べ物へのありがたさが分からなくなるからってよく言ってた。」

「おじいちゃんが居ないときは、コソッとテレビをつけて見てたけど、おじいちゃんが居るときは、おじいちゃんに『テレビつけていい?』って聞いてからつけてた。おじいちゃんが自分でテレビつけて見ているときはなくて、おじいちゃんが見たいテレビがあるときは、そばにいてる人がつけてた。」

「一回目の改装で、テレビはテーブルとともに移動した。食べるところと作るところがひとつになったため、作る人もテレビを見ながら料理をすることができるようになった。ほんで、子供もお風呂を焚くのがガスになったから、時間に余裕ができて食事までのマン

がも見られるようになった。でも、おじいちゃんのお考え方は変わらなかったから、食事中はテレビをつけへんかった。」

「男の人が仕事から帰ってきたら食事っていう感じやったから、それまでは女・子供は余裕があればテレビを見れる感じやった。しかも、テーブルとイスになったから、座りながら宿題をやった。家族団らんの場所が、台所やった。それまでは、作る場所と食べる場所が別々やったからゆっくり座って団らんすることができひんかった。」

「二回目の改装では、テレビ（の数）が増えた。台所、応接間、はなれ座敷（にテレビを置くようになった）。今やったら、子供部屋にもテレビがあるやん。だから、集まってテレビを見る必要がなくなったよね。テレビが増えたらチャンネル争いが減った。大人と子供で見たい番組が違うやんか。大人はニュースが見たいし、子供はアニメが見たかったし。」

「テレビが増えることで、うれしかった。早く食べて隣の部屋でテレビを見ようって思った。このときは、おじいちゃんはずでに死んでもう居てないし、父さんは入院してる時にテレビを見ながら病院食を食べていたから、別に（テレビを）見ながら食事することに反対しなかった。自分から(食事中に)テレビつけてたもん。だから、二回目の改装以降はみんなが自分が見たいときにテレビをつけて見てた。入院生活もちよっと良い経験になったんかな？ って父さんに悪いけど、そう思った。周りの状態が見れて良かったんかな？ って思う。」

幼少時代、テレビは食事をする場所に置いていたが、食事中テレビを見ることは許されなかったという。そして、一回目の改装により、テレビはそれまで食事を作っていた場所に移った。それによって、食事を作る人は作りながらテレビを見れるようになったのだが、食事中は相変わらず、テレビを見られなかったようである。二回目の改装をした後は、上記の語りにもあるようにテレビの台数が増えた。また、その頃からは食事中にテレビを見ることが許されるようになった。

4.21 即席麺・レトルト食品の登場

「カップラーメンとかレトルト食品が出てきた。日清カップヌードル、あれが1970年代。万博のところに『日清カップヌードル、お湯を注ぐだけでできます』っていうのがあった。アメリカ館が宇宙についてしゃべってて、そのときに宇宙服を着た人がカップヌードルのコマーシャルに出てた。だから地球というより、宇宙のなかの地球っていう感じで、宇宙服を着た人がカップヌードルを食べてた。それが衝撃的やった。それはスーパーとか何で

も屋さんのところに置きだした。」

「レトルト食品はミートボール。でも今みたいにレトルト食品がいっぱいあるわけじゃなくて、湯のなかに入れてもどすという感じ。今は電子レンジができてから、レンジでチンするだけということでこんだけレトルト食品がバラエティに富んでるけど、昔は袋に入れてお湯のなかに入れてもどして食べる、それがレトルト食品のはじめみたいな感じ。だから電化製品によって食事の内容も変わる。電気製品の発達によって女の人はずごく楽になったと思う、時間も増えるし。」

4.22 家電製品の発達

「洗濯機とか出てきた。はじめは分離式っていうの。洗うのと脱水がばらばらやったのに1年もしないうちに全自動になった。乾燥機だけは別やけど。でもそれがどんどん進化していくっての。洗濯は女の人がやってた。母さんかおばあちゃんのどっちか。私らがお風呂を焚くことがなくなったら私らのなかでまわしてた。でも男の人は家事は一切しない。『男子厨房に入らず』やから弟は入ったことはない。」

4.23 結婚

「(結婚は)うちのおばあさんのお姉さんがいい人がいるんでお見合いしてもらわれへんかっていうので。それで1回見てほしいっていうのやった。で、お見合いしたということ。相手の家とかある程度わかってるから、同じような状態やから行きやすいんちゃうかなって感じで勧められていった。(実際嫁いで)ぜんぜん違った。まわりの状態はいっしょだった。田舎のなかで、だれだれさんちのだれだれさんっていうの、そういうふうな状態と隣組があって、近所との付き合いを重要視してるっていうの、そういうのはあった。」

Aさんは、1981年に23才で結婚した。その結婚は恋愛ではなく、お見合い結婚であった。

4.24 結婚当初の食事風景

「家のなかに対してはまるっきりK家のはぜんぜん違った。食事にしても全員が揃って食事をするのがない家やった。」

「おじいちゃんはおじいちゃんでお爺さんが入院してはるからか知らないけど、家に女の人がいてないといけないという取り決めがないというのか、自分勝手。食べたいときに食

べる。そして息子も食べたいときに食べる。だから好きなときに食べるという状態で私にはパニック状態。で、ある程度、朝・昼・晩は時間帯はみんなきちっとしてもらえませんかと言ったときに、みんな時間帯がずれ込んで、結局私はどっちに合わせたらいいのって感じ。」

「3人家族でもみんな一緒にご飯を食べることは滅多になかってん。夕食といっても、おじいさんはお昼が2時間ずれるから、夕食も2時間ずれる。パパと私と一緒にお昼を食べるやん、食べ終わって片づけしたらおじいちゃん来るやん。で、おじいちゃんがそこから1時間ぐらい食べる。おじいちゃんのほうが後やった。それから夕食になって、うちの実家は夕食にお酒を飲まへんかったわけ。だから食事は食事でびしっと食べて、そこからお風呂ということになるけど、こっちのおじいちゃんはお酒を飲まはるから先にお風呂に入って、ゆっくりと2時間ぐらいかけてご飯を食べるほう。だからその間ずっと座ってる私は苦痛やった。だから生活自体は全然違った。」

「おじいちゃんはマンションとかを管理してはった。だから時間帯はあってないねんけどマイペースやった。(L家は)賃貸不動産業、マンションとか自分とこの財産の上にもものを建てたりして、それを人に貸して賃貸をもらうっていうの。先祖からの土地を利用してっていう感じ。だから家族制っていうのがないっていうのか。だから反対に、今まで家族制があって決まりがありすぎて私はすごい嫌やと思ってん。もっと自由がほしいと思ってんけど自由がありすぎたら、こうなんのかなと思って。ギャップというのかな。」

Aさんは、結婚当初のL家の取り決めがないという、K家との正反対の状況についていくのに大変、苦労したようである。また、たった3人家族であるのに、時間帯がバラバラで、そのうえその生活リズムを変えようとはしないことに疑問をもったという。

4.25 結婚当初の周囲の様子

「(家族形態は) こっち側にいてはる人はそんなに大人数ではいてはらへんけど、ほんとに村の組織が強かったわ。みんな苗字が違ってても親戚やったから。」

「こんなん言っているのかな。場所が場所だけに建売が建たない。賃貸の家は建つけど、賃貸には子供がないやん。部落とかそういうのが近いから、小学校とかのことを考えて、建売を建てることはしない。だから賃貸のマンションとかそういうのが建つけど、子供が小学校に上がるころにはよそに出て行くっていうの。ここに長居するのは少ない。だから考え方とかそういうのはまわりは古い。」

「自分とのこの同族意識がすごくきつくて、よそものという感じでとらえるというの。でも大人数で生活するのはない。なんやかんや言いながら自分の身内の子供はよそに行ってる。嫌がって。村意識が嫌がって出て行ってる。だからこのまわりでも今いてるのは私らの代ぐらいちゃう。長男やから残ってるって家は少ないな。子供はみんな出て行ってるよ。(L家のまわりが長男でも出て行くのは) 村の意識が強すぎるというのがある。」

「私はおじいちゃんの身内になるからまわりはそういうことは言って来られへんやん。だからそれがまるっきりないと、私はそういうの慣れてるからいいけど、自由奔放に暮らしてた人がそういうので住めるわけないと思う。隣組、何とか組とかいう組織のなか、何でそんな窮屈な金縛りみたいになるのっていうのがあると思う。」

L家のまわりは、K家と比べて、同族意識が強く、そのために長男であってもその意識を嫌がって外に出るケースが多かったようである。また、K家のように大人数で生活している家族は、L家のまわりには、あまりなかったようである。

4.26 娘（筆者）の誕生

「子供ができて、子供ができたら子供の時間帯に合わせられるっていうのと、ある程度のけじめができてきてうれしかったな。それまでは嫁の立場やからそれはできなかつたけど子供ができたら、子供の行く時間帯できちっとしたけじめができてはじめるっていうの、家族っていうのがまたできはじめたと思う。」

「大人3人やったところに麻佑（筆者）っていう子供ができたことによって、その子供の時間に合わせるという決まりができたっていうの。(おじいちゃんも) たまには一緒に食べるようになった。でもマイペース。だから今のパパにはそういうふうな家庭っていうのがないっていうの、自由奔放にいったから。でも自由なことで楽なこともあるし、いろいろあんな。けじめっていうのがあったらなっていうのがある。どっちがいいのかわからんけど。でも子供ができることによって、子供の時間帯と生活リズムができた。」

1984年4月19日に筆者は生まれた。そのことによって、子供の時間帯に合わせるためにそれまではなかった生活リズムができたという。そのことに、Aさんは、とても喜びを感じたようである。

4.27 L家の改装

「(家の改装は) 隣の家との境界線の問題(があった)。今は杭が入ってこっからこま

ですが私のとこですよって言うのやけど、昔はきちっとした書いたものがないから口約束状態。それがきちっと線を引くことになってうちの家が出てないということになったから、もう改装してやり直そうということになった。L家のひさしが横の家に出てないということになってん。それが鬼門のとこにかかってるから、うちの状態がよくないから早くどけてくれということになってん。」

「私は産んだ後やったから大変やってん。ふつうやったらお産の後はあかんっていうやん。でも、それは言ってもらえないから動いてん。それは平成10年ごろ。平成9年にもう壊してんねん。で平成10年に棟上してんねん。だから平成9年の1月に荷造りしてるときにお乳の時間がきてんけど、降ろすの面倒やから、私はそのまま荷造りやってたから。だから壊し始めたのが平成9年の夏ごろやったかな。そっから市から許可がでると、区画整理があるから隣と隣の間建てる時は何メートルあけないといけないとかそういうふうな規制があるから、そういう証明書をあげるのに時間がかかってん。」

「前の道幅でも隣も引いてるやん。で隣と隣の居住を建てる時のあれ(条件)が変わったから。今まで建ててる人が改装する場合は関係ないけど、さらにやり変える場合は何メートルあけないといけないっていうの、消防法とかそういうのが全部変わってくるみたい。火事とかの場合、消防署が入れる状態にしないとイケないから。」

「家の改装をしておじいちゃんの離れと本家とを建てることになった。それによって台所もおじいさんはおじいさんだけ、台所・お風呂は別々になってひとつの家だけで全部賄えるようになった。だからそれによってお風呂の時間帯もこっちに来たときもおじいちゃんが一番、パパ、私という順番やったけど、別所帯になったらすごく楽になった。」

「おじいちゃんが入るまでに別にほかの人が入ってもいいわけやん。(順番があったのは)お風呂のときぐらい、ほかは別に(なかった)。自分のことは自分でしはるから、だから男の分担、女の分担というのはなかったわけ。でも、台所はおばあさんがやってはったし、おばあさんが足が悪かったみたいで、そのときの賄いはおばあさんの身内の人が来てたみたい。近くやから。」

「K家ほどきれいに分離してるということはない。男の人は男の人の役割、女の人は女の人の役割がある程度決められてるほうがいいのかなって思った。ある程度きっちりと決められてるほうがお互いのためにいいのかなって言うのはある。」

改装によってL家は現在のように二世帯になった。L家は男女の役割分担が明確に分離されていなかった。Aさんは、明確に男女の役割分担があったK家と現在のL家とを比べ

て、ある程度の役割分担は必要ではないだろうか？と感じている。

4.28 L家の跡取り

K家とL家という全く違う生活スタイルをもった家族を経験したAさんは、将来について以下のように語っている。

「長男やから継いでほしいというのはない。(長男であっても、誰一人L家に残らない状況になっても)私はいい。仕方がないことやなっているのはある。だから、みんなが一緒に食べたりそういうのはいいけど、自分は親に誕生日とか仕事で忙しかったからしてもらえなかったから、自分の子供にはしてあげようと思った。それはなるべくするように心がけたつもりやねん。だから自分のしたかったことはしたし、また子供は子供で生活しているのがあるから、そのなかに踏み入るのはどうなんだろうっていうのがある。」

「家族は2人(夫婦)がほんとの家族っていうのがあるから、私らの世代まで入って負担をかけるのはどうかと思う。2度と戻られへんときやから、自分が子供に愛情を注ぎたかったら2人でやることやから、そこに私らに手伝えっていうのなら手伝うけど、そこに入り込むのはどうやろうっていうのがある。」

「今は核家族になってて、みんなが自分の道を行くっていうの、自分のしたい放題、今しかないからって思う人がわりと多いやん。自分らがしたいことを今するっていうの、後ではもうできないってうの、我慢するっていうことがないやん。その世代の人と自分らが一緒に住もうってこと自体が無理やと思うねん。その人らも自分のしたいことをしたいのに、ぐじぐじ言う人が横にいたら嫌やと思うので、やはりそういうのは少し離れてるほうがいいのかなって思う。」

以下の年表は、Aさんが生まれてからK家を出るまでのなかでK家にとって重要と思われる出来事、もしくは、家族を変化させるきっかけとなったと思われる出来事を抜き出したものである。そして、その右側には、東大阪市の動きと社会の動きを並べ、家族の変化と地域・社会の変化を見比べやすいようにした。表1では、K家での出来事が東大阪市、さらには社会の変化にも影響を受けていることがわかるだろう。

表1 家族の変化と地域・社会の変化年表
東大阪市の動き

年度	K家の出来事	東大阪市の動き	社会の変化
1953			家庭用冷蔵庫の発売 国産第1号の白黒テレビの発売 テレビ放送の開始
1954			
1955		枚岡市と河内市が発足する	
1956			自動炊飯器の発売 ステンレス流し台の普及
1957			国産第1号のカラーテレビ発売
1958	Aさん誕生(自宅)		世界初の即席麺「日清チキンラーメン」の発売 日本初の缶ビール「アサヒ」から発売される
1959			
1960	Bさん誕生(産院)	人口30万人を超える	カラーテレビの本放送の開始
1961			
1962	Cさん誕生(産院)		
1963			
1964	脚付き白黒テレビを購入	人口40万人を超える	東京オリンピック開催
1965	2層式洗濯機を購入	布施・河内・枚岡3市合併協議会が設置される	全自動洗濯機の発売
1966		布施・河内・枚岡の3市が合併して東大阪市が発足する	家庭用電子レンジの発売
1967			
1968			世界初のレトルト食品「ボンカレー」の発売
1969	初めての自家用車を購入	近鉄奈良線と中央環状線の立体交差完成 人口50万人を超える	大阪万国博覧会の開催
1970	改装① 食事を作る所と食べる所が一緒になる・カラーテレビを購入 トイレが家外から中に移る・1つのテーブルで食事を始める 家に塀・鍵を取り付ける	東大阪市による土地区画整理事業がはじまる	2ドア冷蔵庫の発売
1971	全自動洗濯機を購入		「日清カップヌードル」の発売 マクドナルド日本第1号店オープン ミスタードーナツの第1号店オープン 日本初のプログラム式全自動洗濯機の発売
1972		川俣下水終末処理場が稼動する	
1973		東大阪市公害防止条例が施行される	第1次石油ショック IH調理器の発売
1974			
1975			
1976	祖父入院	近畿自動車道が東大阪の一部まで開通する	オープンレンジの発売
1977	祖父世界・父入院		
1978	改装② 台所の改装・応接間ができる・上座下座の席順がなくなる 家族の食事の時間がばらばらになる・洋式トイレに変わる		
1979			第2次石油ショック
1980			
1981	AさんK家を出る(結婚)		3ドア冷蔵庫の発売

5 結 論

本稿では、「K家の家族関係の変化は、独立的におこったのではなく、地域の変化とともに起こった」という仮説を立て、その仮説モデルを中心的な分析視角としながら、Aさんのライフヒストリーをとりあげて実証的に論じてきた。

前章のライフヒストリーでは、Aさんが日下町に生まれた昭和33(1958)年からL家に嫁ぐ昭和56(1981)年までの23年間にスポットを当てながら、現在に至るまでを時系列に沿ってみてきた。その23年間に、日下町の様子は大きく変化した。

Aさんが生まれた当初の日下町は、溜池があり、田畑が広域に渡って存在していた。また、スーパーマーケットのようなものはなかったため、K家ではほぼ自給自足の生活をしてきた。しかし、昭和42(1967)年に東大阪市が誕生したことによって、上下水道の整備や道路の整備などのさまざまな整備が行われ、学校や住宅が建てられていった反面、溜池や田畑などの自然が徐々に破壊されていった。そのうえ、「住みたいまち」を合言葉に誕生した東大阪市は、後の1970年に開催された大阪万国博覧会と相まって、人口50万人を超えることに成功した。そのことによって、K家のまわりには外部から来る人が1970年から1975年にかけて大幅に増え、Aさんの通っていた学校では、転校生が増えた。

そのころ、K家では1970年に一回目の改装が行われ、上座・下座の席順は依然として残ってはいたものの、料理を作る所と食べる所が一緒になり、一つのテーブルで男女がともに食事をするようになった。改装が行われるまでは、食事を作る所と食べる所は別であり、男女別々の少し離れた長机で食事をしてきた。また、外部から来る人が増えたために、一回目の改装で、K家では扉や鍵を取り付けたようである。

K家の改装は二回行われ、二回目の改装は、1978年に行われた。この改装によって、応接間がつくられ、洋式トイレが設置され、台所の改装が行われた。そして、この改装後から上座・下座の席順はなくなり、それまで全員そろって食事をしてきたのがばらばらになった。このころから、「子ども中心主義」が見られるようになったと考えられ、「家長権」については上座・下座の席順がなくなったことから、縮小もしくは消滅したと考えられる。

つまり、AさんがK家で生活していた23年間に、日下町の様子が1970年代を境に大きく変化しただけではなく、その変化とともに、K家のライフスタイルも徐々に変化していったといえる。当初、日下町の変化がもたらすK家への影響は一方的なものだと予想していた。しかし、そうではなかった。1970年代から日下町の人口が増えたことにより、Aさ

んのまわりには転校生が増えた。その転校生との交流のなかで、Aさんが洋式トイレや洋菓子などの新しい文化に出会っただけではなく、逆に、転校生も日下町に古くからあるお祭りや地蔵盆に参加し、お誕生日会などお互いの家を行き来するうちに、日下町の文化を取り入れていったのである。つまり、お互いに影響を与えあっていたことが明らかになった。このことから、K家のライフスタイルの変化は、1970年ごろから日下町の人口が増え、新しい文化を持った人たちと出会うことによってもたらされたと考えられるのである。また、K家は、庭園石材業を営んでいたため、仕事柄、新築の家の文化に触れる機会が多かった。そのため、自家と新築の家との違いを認識しやすく、新しい文化を取り入れやすい環境にあったこともK家のライフスタイルの変化に関与しているのではないだろうか。

本稿では、K家という家族のライフスタイルの変化という一見、私的なことのように思われる変化が、実は、日下町という地域の変化と関係し合いながらもたらされた、という新たな視点を提供することができたように思われる。

おわりに

私たちのとても身近に存在する家族というのは、決して「当たり前」ではなく、時代とともに変化し続けているのである。また、それぞれに個別の歴史を持っている。本研究によって筆者自身の母の実家であるK家の歴史を垣間見ることができた。K家の歴史は、K家のなかだけで展開されたのではなく、日下町という地域の変化と関係し合いながら展開されたことが母にインタビューすることで立証された。

母のライフヒストリーを聞いているなかで、筆者の知らない日下町の様子が脳裏に広がり、現在の様子しか知らない筆者にとっては、とても新鮮であった。しかし、住宅やマンション、学校、スーパーなどが増え便利になった反面、自然というものが消滅していったことに悲しみを覚えた。つまり、ライフヒストリーのなかには、現在と比べていろいろ考えさせられる情報が豊富に含まれていた。本研究によって、筆者自身の立てた仮説が立証されただけではなく、筆者自身の自己成長のためにもなっていたことに最後になって気付いたのである。

参考文献

野々山久也・渡辺秀樹編, 1999, 『家族社会学入門—家族研究の理論と技法』文化書房博文社.

- 望月嵩, 1995, 「家族社会学からみた現代日本家族の変動」日本家族心理学会編『家族—その変化と未来』金子書房, 195-206.
- 副田義也・樽川典子編, 2000, 『流動する社会と家族Ⅱ 現代家族と家族政策』ミネルウァ書房.
- 森岡清美編, 1983, 『家族社会学〔新版〕』有斐閣双書.
- 後藤澄江, 1997, 『現代家族と福祉』有信堂高文社.
- 落合恵美子, 1994, 『21世紀家族へ (第3版)』有斐閣.
- 松本通晴, 1981, 「家の変動ノート」同志社大学人文科学研究所『共同研究日本の家』国書刊行会, 85-114.
- 東大阪市企画部, 1987, 『東大阪のあゆみ—東大阪市制20周年記念誌—』東大阪市.

一頁あたりの字数 (40字×30行)

総ページ数 (本文46ページ)

400字詰め原稿用紙 (104枚)